大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.70　　2017. 7. 1.

目次

複数学部化と「総合」研究　1
2017(平成29)年度「特定・指定研究」「資料室」等研究組織一覧　2
2017(平成29)年度「指定研究」等研究目的紹介　4
2017(平成29)年度「一般研究」研究組織一覧　9
2017(平成29)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介　11
海外学会参加・研究調査報告　18
国内研究調査報告　26
公開講演会・公開研究会　28
東京分室PD研究員個人研究紹介　33
安冨信哉先生追悼　34
彙報　36

複数学部化と「総合」研究

大谷大学長・教授　木越　康

2018年度から大谷大学は、文学部に社会学部と教育学部の二学部を加えた三学部体制となる。短期大学部での教育活動をのぞけば、これまで長く単一学部で教育にあたってきた大学にとって、大きな変革であろう。多くの私立大学が苦心する建学の理念の具現化が複数学部化によってさらに困難になるのではないか、多様化が予想される各学部の学修活動をどう有機的に支援することができるのかなど、課題は山積であるが、教職員による慎重な議論と調整の中で、新しい教育をスタートさせる準備が着々と進んでいる。特にカリキュラムをみれば、これまで学生による学びの集大成としてあった「卒業論文」が、多様な学修成果の受け入れに備えて「卒業研究」に改められた。「論文」という形で表現されてきた学修成果の報告が、今後は地域での活動や教育実践の研究報告、あるいは何らかの「作品」という形で提示されるのかもしれない。

このような複数学部化に伴って、研究活動の中心を担ってきた真宗総合研究所も少なからず影響を受けることになるであろう。さらに言えば、刺激を受けて新しい形での展開を遂げていかなければならないものとも思われる。教育の視点での複数学部化は長年にわたって議論されてきたが、研究においてどのような変革が求められるのか、実は十分に議論されているわけではない。人文社会科学系の学問領域に対して厳しい風が吹く昨今、複数学部化を好機として大谷大学によって新しい形での研究成果を社会に示していくことができれば、三学部体制へ踏み切る意義はより大きなものとなるであろう。

この度の特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」は、新しい大谷大学を象徴する研究の一つとして立ち上げたものである。テーマにある「新しい時代」とは、ますます進む高齢化社会や過疎化を指す。大都市圏への人口集中が進む中で地方の小規模市町村からは若年層が流出し、共同体が存続の危機にさらされている。伝統的に村落を支える役割を担ってきた地方寺院も、それらと命運を共にする。テーマ後半の「寺院のあり方研究」は、しかしそのような寺院の再生に研究の主眼があることを意味するものではない。消滅の危機にさらされる共同社会を、寺院はどのように支え、歩みを共にすることができるのか、研究の狙いはそこにある。

このようなテーマでの活動で最も重要なのは、異なる分野の専門家たちによる交流と協力である。メンバーには、真宗学・歴史学・宗教学・地域社会学・社会福祉学と、多様な研究者が加わっている。取り組みとしてはかなり後発となるため、先行する外部の諸機関や諸氏にも協力を仰がなければならない。専門分野はもちろん、宗派や宗教などの領域を越えた協同作業の中で、これまでにはない形での研究が進み、融合型の成果が提示されることが期待される。各専門家がそれぞれの知識とスキルを駆使して、地域と寺院のあり方について、多少なりとも現場を扶翼することができるプランが案出されれば幸いである。

「文学研究」は、社会や人間の現実から切り離されて書籍の中に鎮座する文学的知性を操作するためだけにあるのではない。「社会科学」もまた、歴史や人間の心を無視して、現前の課題解決に向けた活動があるのではない。「教育」に関する学問も、哲学や思想を離れて、人間の成長を議論することはできないであろう。各分野がそれぞれの領域に閉じ籠ることなく、相互に交流し融合して、研究活動は展開されなければならない。

新しい大谷大学は、教育システムとしては文学部・社会学部・教育学部と三つにわかれるが、研究活動はそれによってかえって総合されなければならない。その意味で、「真宗総合研究所」の活動意義も、今後いよいよ真価が問われることになるのであろう。

2017（平成29）年度「特定・指定研究」「資料室」等研究組織一覧

【特定研究】

研　究　名	研究課題及び研究組織	
新しい時代における寺院のあり方研究	研究課題	現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究
	研究代表者	木　越　　康（学長・教授・真宗学）
	研　究　員	東　舘　紹　見（教授・日本仏教史）
		山　下　憲　昭（教授・社会福祉学）
		徳　田　　剛（准教授・地域社会学）
		藤　枝　　真（准教授・宗教学・哲学）
		藤　元　雅　文（短期大学部講師・真宗学）
	嘱託研究員	本　林　靖　久（本学非常勤講師）
	研究補助員（RA）	松　岡　淳　爾（博士後期課程第１学年）

【指定研究】

研　究　名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井　上　尚　実
	研　究　員	井　上　尚　実（短期大学部教授・真宗学）
		Robert F. Rhodes（教授・仏教学）
		新　田　智　通（講師・仏教学）
		Michael J. Conway（講師・真宗学）
		井　黒　　忍（准教授・東洋史学）
	嘱託研究員	Michael Pye（マールブルク大学名誉教授）
		James C. Dobbins（オバーリン大学教授）
		Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
		Paul Watt（早稲田大学留学センター教授）
		Galen Amstutz（仏教大学院大学(IBS)非常勤講師）
		Max Deeg（ウェールズ大学カーディフ校教授）
		Thomas P. Kasulis（オハイオ大学名誉教授）
		羽　田　信　生（毎田周一センター所長）
		阿　満　道　尋（モンタナ大学准教授）
		Wayne S, Yokoyama（花園大学元講師）
	研究補助員（RA）	梶　　哲　也（博士後期課程第３学年）
		常　塚　勇　哲（博士後期課程第１学年）
西蔵文献研究	研究課題	チベット語文献のデータベース化
	研究代表者	三　宅　伸一郎
	研　究　員	三　宅　伸一郎（准教授・チベット学）
		上　野　牧　生（短期大学部講師・仏教学）
		松　川　　節（教授・モンゴル学）
	嘱託研究員	白　館　戒　雲（本学名誉教授）
		髙　本　康　子（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 共同研究員）
		伴　　真一朗（2016年度西蔵文献研究嘱託研究員）

		P. DELGERJARGAL（モンゴル国立大学総合科学部副学部長） 山　口　欧　志　（奈良文化財研究所研究員） 渡　邊　温　子　（本学非常勤講師・特別研究員）
	研究補助員(RA)	ARILDII BURMAA　（博士後期課程第３学年） GENGZANG QIEZHU（博士後期課程第３学年）
ベトナム仏教研究	研 究 課 題	ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究
	研究代表者	織　田　顕　祐
	研　究　員	織　田　顕　祐　（教授・仏教学） 浅　見　直一郎　（教授・東洋史学） 釆　睪　　晃　（准教授・仏教学）
	嘱託研究員	箕　浦　暁　雄　（准教授・仏教学） 松　浦　典　弘　（研究所主事・准教授・東洋史学） 桃　木　至　朗　（大阪大学教授） 大　西　和　彦　（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員） 福　島　　重　（函館大谷短期大学非常勤講師） 宮　嶋　純　子　（関西大学東西学術研究所非常勤研究員）
東京分室指定研究	研 究 課 題	宗教的言語の受容／形成についての総合的研究 ―哲学的・宗教学的・人類学的視点から―
	研究代表者	池　上　哲　司
	研　究　員	池　上　哲　司　（本学名誉教授） 松　澤　裕　樹　（PD研究員・西洋哲学） 田　崎　郁　子　（PD研究員・文化人類学） 藤　原　　智　（PD研究員・真宗学） 稲　葉　維　摩　（PD研究員・仏教学）

【資料室】

名　　称	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織	
大谷大学史資料室	研 究 課 題	大学史関係資料の収集・整理
	室　　長	松　浦　典　弘　（研究所主事・准教授・東洋史学）
	嘱託研究員	松　岡　智　美　（本学博士後期課程修了）
	研究補助員(RA)	老　泉　　量　（博士後期課程第２学年）
デジタル・アーカイブ資料室	研 究 課 題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室　　長	松　浦　典　弘　（研究所主事・准教授・東洋史学）
	嘱託研究員	平　野　寿　則　（准教授・日本近世史・近世仏教史・真宗史） 清　水　洋　平　（本学非常勤講師・特別研究員） 舟　橋　智　哉　（2016年度西蔵文献研究嘱託研究員） 山　本　春　奈　（本学博士後期課程修了）

2017（平成29）年度「指定研究」等研究目的紹介

新しい時代における寺院のあり方研究

現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究

研究代表者・学長　木越 康
（真宗学）

今日までの日本社会において、各地に所在する寺院は大きな役割を果たしてきた。特に各地域の社会においては、葬儀や法要等の執行をはじめ、地域コミュニティの核ともなる種々の行事の開催、あるいは地域における種々の行事・会合等への場の提供などの多様な活動を通じ、地域コミュニティの形成・維持・発展や、それに強い影響を与えてきた教えの伝達等の面で、非常に重要な役割を担ってきた。

近年、全国的な少子高齢化の流れや、人口の都市部への集中と地方における過疎化の進展、更には地域構成員相互における関係性の稀薄化等の深刻な諸動向のもとで、地域社会においてはこれまで築いてきたコミュニティを維持することが難しい状況に立ち至っている。そして、こうした状況のもとで、既に多くの地域においては、従来、地域社会と密接に関わりつつ存在していた寺院の存続そのものが叶わない、あるいは極めて危ぶまれている深刻な状況にある。しかし、これと同時に、各地域が上述のような問題点を抱えている現代の日本においては、これらの諸問題に対応し、より良い社会を築いていく核となるべき存在、就中、歴史的にそうした役割を実際に担ってきた寺院に寄せられる期待が、改めて高まってきていることもまた言うを俟たない。

本研究は、こうした現状を踏まえつつ、様々な問題を抱える現代社会における寺院の果たし得る役割について、これまでの歴史的な経緯や現に行われている活動等への理解を踏まえて、種々の面より研究し、その成果を公開していくことを目的とするものである。

３か年でのプロジェクトのうちの初年度に当たる今年度においては、主として以下の３点から研究を進めていきたい。

①各研究員の専門分野に関する研究を深め、これを踏まえて社会と寺院との関係について探究する中で、問題点・課題を整理・共有する。

②大学内外において研究課題に関連する種々の活動を行っている方を招き、その実践内容と問題点、課題等をお話しいただく。

③大学内外において必要な調査を実施し、その成果の分析を通じて問題点・課題を明確にする。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。今年度は英米班、東アジア班の二班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

〈研究テーマ〉

①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。

②東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。

〈活動内容〉

《英米班》

①国際学会への参加

１）国際真宗学会（IASBS）第18回学術大会（2017年６月30日㈮～７月２日㈰、武蔵野大学）

井上尚実研究員、東真行助教（真宗学科）、川口淳助教（真宗学科）、ジェフ・シュローダー（オレゴン州立大学講師、招聘）がパネル「真宗大谷派近代教学における‘利他’」（‘Benefiting Others’ in Modern Shin Buddhist Doctrinal Studies of the Ōtani-ha）で研究発表を行う。

ロバート・F・ローズ研究員、マイケル・J・コンウェイ研究員、ジェームズ・ドビンズ嘱託研究員が駒澤大学の藤井淳准教授が組織するパネル「誰が誰を利益するのか:真宗思想の‘利他’における如来と衆生」(Who Benefits Whom? The Tathāgata and Sentient Beings in Benefiting Others in Shin Buddhist

Thought）で研究発表を行う。

２）国際仏教学会（IABS）第18回大会（８月20日㈰～ 25日㈮、トロント大学）

梶哲也研究補助員（仏教学専攻博士後期課程）と上野牧生講師（短期大学部仏教科）が以下の研究発表を行う。

Kaji Tetsuya, “On the Groupings of *Kleśa* in the Sarvāstivāda School.”（説一切有部における煩悩群について）

Ueno Makio, “Word by Word: A Commentarial Techniques in Vasubandhu’s *Vyākhyāyukti*.”（逐語的：世親の『釈軌論』における注釈の技法）

３）ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）第15回国際会議（８月30日㈬～ ９月２日㈯、リスボン）

「時」“Time”をテーマとする哲学・思想史部会においてマイケル・J・コンウェイ研究員とメリッサ・カーリー准教授（オハイオ州立大学）が以下の研究発表を行う。

Michael Conway, “Inverting the Flow of Time: Soga Ryōjin’s Grasp of Historicity and Potentiality in the Single Thought Moment of Faith”（時の流れを逆転させる：曽我量深による歴史性と信の一念の可能性の受けとめ）

Melissa Anne-Marie Curley, “Thought-Moment and Historical Moment: Tanabe Hajime’s Temporal Reading of the Pure Land Imaginary”（一念と歴史的瞬間：田辺元による浄土教的仮想の時間的現世的読解）

４）南都浄土教に関する国際ワークショップ（９月28日㈭、マッギル大学）

モントリオールのマッギル大学で開催される「南都浄土教ワークショップ」に助言者としてロバート・F・ローズ研究員が参加する。

②真宗関係の翻訳研究

１）『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトが立ち上がった。今後５年間の予定で年２回（３月にバークレー、８月に京都で１回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に２冊の研究書（注釈付き本文英訳＋研究論文集）出版を目標とする。その第２回ワークショップを2017年８月４日㈮から７日㈪に大谷大学で開催する。

２）教師課程教科書『教団の歩み』英訳出版

阿満道尋嘱託研究員を中心に進めてきた『教団の歩み』英訳を真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版するために、英訳の最終確認と編集校正作業に協力する。

③国際シンポジウムの成果出版

１）真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの成果出版

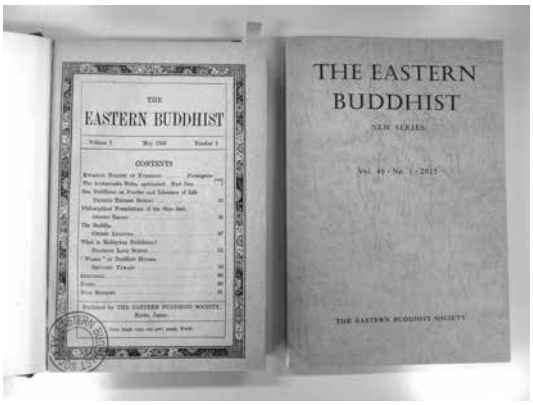
2015年６月26日㈮・27日㈯の２日間、大谷大学で*Cultivating Spirituality*出版（SUNY, 2011）を記念して開催されたシンポジウムの成果を、マーク・L・ブラム教授（嘱託研究員）とマイケル・J・コンウェイ研究員の共同編集により欧米の大学出版から出版する予定で編集作業を進める。

２）エトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）と共催の第２回国際仏教シンポジウムの成果出版

2016年５月26日㈭・27日㈮の２日間ハンガリーのELTE東アジア研究所の共催により、「仏陀の言葉とその解釈」というテーマで開催した第２回共同シンポジウムの成果を、ELTEのハマル・イムレ教授と井上尚実研究員の共編で、2018年３月末までに出版する予定で編集校正作業を進める。

④The Eastern Buddhist Society東方仏教徒協会（EBS）の事業

2017年４月１日に真宗大谷派から大谷大学に移管された「東方仏教徒協会」（EBS）の業務を、真宗総合研究所国際仏教研究の英米班が引き継いでいく。EBSは1921年に、真宗大谷派の全面的な支援のもと、鈴木大拙、佐々木月樵、赤沼智善らにより設立された著名な仏教協会であり、特に大乗仏教の意義を欧米に伝えることを主な目的としてきた。この協会を継続的に発展させるため、今年度は移管に



1921 年発行の第１号（左）と
最新の The Eastern Buddhist 誌

伴う体制の整備を行ない、特に英文学術誌*The Eastern Buddhist*の編集・出版を順調に継続できるように組織を再構築して軌道に乗せる。

⑤公開講演会の開催

国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を３回程度開催する。

⑥真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

電子ジャーナル掲載論文を含めた欧文の仏教学・真宗学関係の近刊データを集めて整理し、公開できるように準備する。国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について、移管できるものは図書館で検索閲覧できるようにする。

《東アジア班》

①中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づき、本年度においても引き続き、双方の研究者が往来し、本テーマに関わる共同研究を実施することとし、本学から２名を派遣、先方から２名を招聘し、それぞれ公開研究会を開催する。

②2015年12月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集を出版する。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・准教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

（１）専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること

（２）重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること

を目的としている。

また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・経典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。この目的を達成するために、2017年度は以下の研究を進める。

１．チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

シャクリンパ（shag rings pa /shag rin pa）著『プラサンナパダー註（*dBu ma tshig gsal ba'i ṭi ka bshad sbyar snying po*）』(no.13964)の影印及び校訂テキストの刊行を行う。本文献は、『中論』の注釈書『プラサンナパダー』の第１章に対する注釈で、大谷大学図書館にのみその所蔵が確認されている稀覯書である。同じく稀覯書である『サンプ寺誌』(no.13981)の画像データ公開に向けた準備作業も行う。また、寺本婉雅旧蔵チベット語版『モンゴル仏教史』テキストの基礎的研究作業や『プトン仏教史』の邦訳研究を行う。

２.モンゴル国立大学との共同研究

第１期（2013－15年度）における研究活動の成果物として報告書の刊行を行うとともに、「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～ 17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」の研究テーマのもと、第２期（2016－18年度）学術交流協定による交流および調査研究活動を実施する。

３.寺本婉雅関連資料の研究

内外の研究者を集め、今後の研究方針策定に向けた研究会を実施するとともに、寺本婉雅関連資料の国内における所蔵情報等を収集する。また、既に作成済みである宗林寺・村岡家所蔵資料目録の公開を目指す。

４.海外の研究者・研究機関との交流

中国におけるチベット学の中心拠点である中国蔵学研究中心との研究交流を推進する。また、随時、海外のチベット学研究者らを招いての公開研究会を開催する。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授　織田 顕祐
（仏教学）

ベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づき共同研究を推進する。

ベトナムとの学術交流は､大きく二つの意義を持つ。第一に、これまで十分検討されてこなかったベトナム仏教の調査を実施し、ベトナム仏教の一端を明らかにする。第二に、その活動を通して得られたベトナム仏教の独自性に照らして、我々もまた日本仏教史や東アジアの仏教の展開を外側から再検証する視点を得る。

上記の研究目的を達成するために、宗教研究院と相談しながら、具体的には以下を実行する。

1.「日本仏教概説」の編纂及び、「ベトナム仏教概説」日本語訳の推進。
2. 北部ベトナム寺院調査・所蔵文献・版木調査の更なる推進と「寺院資料集」への準備。
3. ベトナムにおける「日本語研究教育を含む日本研究・東アジア研究・仏教研究」の実態の把握。
4. ベトナムの仏教（宗教）・歴史・文化に関する文献資料の収集
5. ベトナム仏教史の基本資料となる『禅苑集英』の読解。

これらのうち、日本仏教概説の編纂は、日本の仏教思想史を独自の見識をもって提示することを意図している。日本仏教の展開を、アジア地域における異文化交流のなかで捉え、その時々の仏教思想の特徴を明確にしたい。これによって、日本仏教の啓蒙書をベトナム語ではじめて提供することになる。また、「ベトナム仏教概説」は、ベトナム人が著したベトナム仏教の概説書としては、日本語で読める最初のものとなる。著者である宗教研究院グェン・クオック・トゥアン院長が６月で院長職を退任となり、より執筆の時間が取れるようになるため、今年度中に原著の完結を見ることができよう。

また、寺院調査・所蔵文献・版木調査によって、ベトナム寺院資料集がまとめられれば、日本語によるベトナム仏教研究のための基礎資料ともなる。

これらによってベトナムにおける仏教受容の一側面が明らかになれば、アジアにおける仏教受容・伝播を軸とした相互交流の実態を解明する手掛かりを得ることにつながり、東アジア・東南アジアの地域文化史に新たな視点を提供することが可能になろう。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授　松浦 典弘
（東洋史学）

本資料室の任務は、大谷大学の歴史にかかわる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の方策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるようにすることである。未だ十分に整理できていない所蔵資料の分類整理を継続的に進めながら、図書館１階エントランスホールに借り受けている展示ケースを活用し、年２～３回のスポット展示によって所蔵資料の公開・展示を行う。

また、今年度も引き続き全国大学史資料協議会の研究会（西日本部会）に参加し、他校のアイデアやノウハウを持ち帰って、本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善に役立てる予定である。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・准教授　松浦 典弘
（東洋史学）

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を継続的に行う。その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌学データベースとして登録する作業を続けており、今年度も引き続きデジタル・アーカイブ化を進めていく。ただし、作業の完了までには、なお歳月を要すると見込まれる。

本年度より本学博物館所蔵のパーリ語貝葉写本の研究とデジタル・データ化を、本資料室が担当することとなった。付随する資料（包み布、挟板）も併せて、引き続き研究と作業を進めていく。

また、昨年度末を以て閉室した東本願寺海外布教資料室で整理していた資料も、当面は本資料室で管理す

ることとなり、必要に応じて整理を進めていく予定である。

東京分室指定研究

宗教的言語の受容／形成についての総合的研究
―哲学的･宗教学的･人類学的視点から―

研究代表者・名誉教授　池上 哲司
（哲学・倫理学）

真宗総合研究所東京分室での最初の共同研究となる本研究は、分室設置のねらい、すなわち東京という激しく流動する思想の場で自らの思索と研究を鍛え直すことを目指して、宗教において語られる言葉が現実に生きるわれわれにとってどのような働きをもたらすかを解明しようとするものである。

以上のごとき課題の下、松澤研究員は名高い神学博士であるマイスター・エックハルト（ca.1260-1328）が、なぜドイツ語説教で異端的言説をなすに至ったのかを究明する。その際、彼のラテン語著作における聖句解釈の方法とドイツ語著作におけるそれとを比較することで、言葉を受容し伝える者としてのエックハルトの思索が具体的になるはずである。

田崎研究員は、タイとミャンマーにおけるカレンと呼ばれる少数民族の事例を取り上げる。つまり、カレンのプロテスタント･キリスト教の受容を通じたローカルな言語と社会の動態を調査･研究することで、宗教の言葉が現実の日常生活に何をもたらしているのかが明らかになるはずである。なかでも、正典の翻訳によって起こるずれや形成される新しい言説、解釈の問題などに着目する。

藤原研究員は、浄土仏教の伝統においてその中心にある「南無阿弥陀仏」という仏の名号に取り組む。というのは、この六字の言葉を受容し、讃歎するというかたちで新たな言葉が創出され、その循環として浄土仏教は伝統されてきたからである。本研究では、その言葉の探求を、親鸞（1173－1262）と、その言説を近代に受容した清沢満之（1863－1903）を中心に確かめる。

稲葉研究員は、パーリ語仏典に用いられる用語について、単語の基本的意味を出発点としてその用法や意味内容の理解を目指す。このことを通して、仏教以前の祭式文化からどのように仏教が興ったか、そして仏教の革新的な点はどこかが考察される。

昨年度は､現代における宗教の在り方についてタイ･チェンマイでのキリスト教及び仏教の調査研究を行ったが、今年度はタイ・ミャンマーでのキリスト教調査に加えて、ギリシャでの東方キリスト教の調査研究を計画している。

2017（平成29）年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2013～2017年度「科研費」採択】 一般研究（小谷班）	研究課題　スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究 研究代表者　小谷　信千代 研究員　小谷　信千代（本学名誉教授・特別研究員） 協同研究員　箕浦　暁雄（准教授・仏教学） 上野　牧生（短期大学部講師・仏教学）
【2014～2018年度「科研費」採択】 一般研究（柴田班）	研究課題　紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析 研究代表者　柴田　みゆき 研究員　柴田　みゆき（教授・情報処理学） 三浦　誉史加（准教授・英文学・英米文化） 協同研究員　松浦　亨（北海道大学病院企画マネジメント部臨床教授） 杉山　正治（本学非常勤講師） 生田　敦司（本学非常勤講師） 清水　利明（財団法人比較法研究センター特別研究員） 横澤　大典（本学非常勤講師） 平塚　聡（四条畷学園短期大学講師）
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究（武田班）②	研究課題　アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究 研究代表者　武田　和哉 研究員　武田　和哉（准教授・歴史学・考古学・人文情報学） 三宅　伸一郎（准教授・チベット学） 協同研究員　渡辺　正夫（東北大学大学院生命科学研究科教授） 鳥山　欽哉（東北大学大学院農学研究科教授） 吉川　真司（京都大学大学院文学研究科教授） 横内　裕人（京都府立大学文学部教授） 江川　式部（明治大学商学部兼任講師） 等々力　政彦（2016年度一般研究武田班②協同研究員） 清水　洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（上田班）	研究課題　ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究 研究代表者　上田　敏樹 研究員　上田　敏樹（准教授・情報工学） 福田　洋一（教授・仏教学） 柴田　みゆき（教授・情報処理学） 酒井　恵光（准教授・計算機科学） 高橋　真（講師・比較認知科学） 協同研究員　平澤　泰文（本学非常勤講師） 池田　佳和（元本学特別任用教授）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（松川班②）	研究課題　モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究 研究代表者　松川　節 研究員　松川　節（教授・モンゴル学） 三宅　伸一郎（准教授・チベット学）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）	研究課題　変動帯の文化地質学 研究代表者　鈴木　寿志 研究員　鈴木　寿志（教授・文化地質学） 廣川　智貴（准教授・ドイツ文学） 協同研究員　清水　洋平（本学非常勤講師・特別研究員） 研究協力員(支援)　岡田　笙（放送大学教養学部履修生）

【個人研究】

研究名等	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織
【2014～2017年度「科研費」採択】 一般研究（田中潤一班）	研 究 課 題　ハンス･リップス解釈学におけるパトスを基盤とした知識教授理論の研究 研究代表者　田　中　潤　一（准教授・教育学・教育哲学）
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究（田中正隆班）	研 究 課 題　変動期アフリカ系社会におけるメディアリテラシーと公共圏の展望 研究代表者　田　中　正　隆　（准教授・社会学）
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究（井黒班）	研 究 課 題　前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織 研究代表者　井　黒　　忍　（准教授・東洋史学）
【2015～2017年度「科研費」採択】 一般研究（西沢班）	研 究 課 題　口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究 研究代表者　西　沢　史　仁　（特別研究員）
【2015～2018年度「科研費」採択】 一般研究（森班）	研 究 課 題　北朝鮮の音楽政策に関する研究 研究代表者　森　　類　臣　（任期制助教・特別研究員）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（徳田班）	研 究 課 題　人口減少時代の地方都市・中山間地域の多文化化と地域振興に関する社会学的研究 研究代表者　徳　田　　剛　（准教授・地域社会学）
【2016～2019年度「科研費」採択】 一般研究（脇中班）	研 究 課 題　再犯リスク低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価 研究代表者　脇　中　　洋　（教授・発達心理学・法心理学）
【2016～2017年度「科研費」採択】 一般研究（関本班）	研 究 課 題　『苦の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成 研究代表者　関　本　真　乃　（本学非常勤講師・特別研究員）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（宮崎班）	研 究 課 題　現存大蔵経諸本をもちいた〈阿闍世王経〉漢訳諸本に関する文献学的研究 研究代表者　宮　崎　展　昌　（任期制助教・特別研究員）
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究（堀田班）	研 究 課 題　ジャイナ教の死生観に関する基礎的研究－断食死儀礼の規定を中心として 研究代表者　堀　田　和　義　（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（阿部班）	研 究 課 題　東南アジアサッカー市場における移民選手の戦略とネットワーク 研究代表者　阿　部　利　洋　（教授・社会学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（高瀬班）	研 究 課 題　小規模小学校で活用できる体育教材の開発 研究代表者　高　瀬　淳　也　（准教授・体育科教育学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（福田班）	研 究 課 題　インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築 研究代表者　福　田　洋　一　（教授・仏教学）
【2017～2021年度「科研費」採択】 一般研究（上野班）	研 究 課 題　世親作『釈軌論』の総合的研究 研究代表者　上　野　牧　生　（短期大学部講師・仏教学）
【2017～2018年度「科研費」採択】 一般研究（田鍋班）	研 究 課 題　「黒ノート」に依拠したハイデッガーのナチズム問題の再検討 ―メタポリティークを軸に 研究代表者　田　鍋　良　臣　（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（塚島班）	研 究 課 題　19世紀フランス詩における宗教的混淆―教育から文学創造へ― 研究代表者　塚　島　真　実　（任期制助教・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（清水班）	研 究 課 題　東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明 研究代表者　清　水　洋　平　（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（渡邊班）	研 究 課 題　『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明 研究代表者　渡　邊　温　子　（本学非常勤講師・特別研究員）
【本研究】 一般研究（大原班）	研 究 課 題　省察的実践者としての福祉専門職像の再構築に関する臨床研究 研究代表者　大　原　ゆ　い　（講師・社会学）
【予備研究】 一般研究（藤田班）	研 究 課 題　「世界文学研究」の方法論構築―サン＝テグジュペリ『星の王子さま』研究を通じて 研究代表者　藤　田　義　孝　（准教授・フランス文学）

2017（平成29）年度「一般研究」（新規採択課題）研究目的紹介

共同研究

変動帯の文化地質学

研究代表者・教授　鈴木 寿志
（地質学）

私たちは平成27・28年度の科学研究費補助金挑戦的萌芽研究によって「文化地質学」という学問領域を提唱し、発展させてきた。平成29年度からは科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）として、さらに４年間文化地質学の研究を推進していく運びとなった。

本共同研究では、文化地質学の中でも特に変動帯に関する地質と文化の関連に焦点を当て、変動帯の代表としての日本文化の実相を浮き彫りにしていく。日本列島は大陸プレートの下に海洋プレートが沈み込む変動帯に位置する。変動帯では頻繁に地震が発生し、それに伴う津波や斜面崩壊などの自然災害が絶えない。しかし日本列島に住む人々は、災害にただ打ちひしがれていただけではなく、災害の困難を乗り越えてたくましく生きてきた。そのような自然との関わりは、磐座に神性を見出すといったアニミズムの自然観と密接に関わっていると考えられる。それは数千年にわたり、人々が変動する大地と関わる中で成立した哲学であり、日本人が変動帯に生きる鍵が隠されている。本共同研究では、地質学と人文科学の専門家が協同して、変動帯の文化特性を安定大陸の地質文化と対照させながら明らかにし、私たちが安心して変動帯で生きていくための方策を見出すことを目的とする。

具体的には、変動帯と安定大陸の地質に関わる文化について、（１）～（４）の研究課題を設定し研究を進める。（１）仏典にでてくる地質事象について文献調査を行い、自然災害と仏教信仰との関わりを考察する。（２）薩摩・大隅半島のシラス台地や山梨県の扇状地において、湧水分布と酒蔵（焼酎・葡萄酒）立地の関係を調査し、地質と醸造文化の関連を明らかにする。（３）変動帯特有の山岳地形が温帯モンスーンの気候区に位置することで生じたと考えられる文化特性を考察する。（４）ドイツ文学にみられる鉱物モティーフの分析と解釈を進め、詩的想像力の仕組みを明らかにする。

個人研究

変動期アフリカ系社会における メディアリテラシーと公共圏の展望

研究代表者・准教授　田中 正隆
（文化人類学）

アフリカでは携帯端末が急速に普及するなかで、人々がラジオ、TVの放送を受信し、番組に参加して、「公共」を問い、語りあう場が生じつつある。メディアは経済、政治、社会活動の場への個人の参加を容易にしたが、情報の格差が新たな不安や対立を生み出している。本研究はグローバル化するアフリカ社会で、メディアがどのように人々の生活に浸透し、その暮らしを構築するかを、ブラジルのアフリカ系社会との比較から明らかにする。とりわけ、個々人の生活目線や個人像に焦点をあてることで、マスメディアやモバイルメディアを人がどのように利用し、それが人の生活をいかに変容させてゆくかを明らかにする。

歴史上、最多の黒人奴隷の入植地となったブラジルは人種格差問題に悩んでいる。搬出元となったベナンは今、文化、経済、政治的にディアスポラの連帯を求める動きがある一方で、国内に民族間の葛藤を抱える。メディアが伝える伝統文化や混血＝平等イメージは、人種、民族間対立を隠ぺいしている。これをふまえて、本研究は、メディアと関わる政治家、社会運動家、ジャーナリストの個人像を通して、社会の葛藤と変容を明らかにする。人の生活史はメディアに採り上げられ記録されることで、変化のきっかけを得たり再構築される。他方、政変や紛争で不安定な地域では、メディア業界が政治、経済との癒着など汚職の現場ともなりうる。メディアが民族間の対立や憎悪を助長する事例まで検討課題とする。

メディアは人と人との媒介となるにも関わらず、過剰な情報を取捨選択することができないために、今日むしろ対立や格差、孤独を増幅し、社会的、精神的危機を招くことが深刻な問題となっている。各地の事例からメディアの負の側面をも対照することで、この問題の解決の糸口を探る。放送と通信が融合した今、人はどのように社会と、また「公共」なるものとつながりうるのか。発展途上のアフリカ諸国と、新興国ブラジルというメディア導入と社会変化が著しい地域の事例を対照する総合研究を展開する。

個人研究

北朝鮮の音楽政策に関する研究

研究代表者・任期制助教　森 類臣
（社会学・韓国朝鮮学）

日本における朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮。以下、朝鮮という）に関する学術研究は、政治・経済構造の分析や安全保障などのナショナルな関係を扱う国際政治学的研究に力点が置かれてきた。一方で、朝鮮の文化や日常生活についてはあまり学界の注目を受けず、ゆえに学術研究も進まなかった。その理由は、政治･経済分野に比べて二次的な研究とされてきたこと、依拠できる一次資料が乏しいことなどである。しかし近年、韓国・米国において朝鮮の文化や日常生活に着目する研究が進捗を見せている。その理由として、①朝鮮と国交のある旧社会主義国のアーカイブが資料公開をし始め、それによって一次資料の発掘が続いていること②韓国において、脱北者への聞き取り調査による文化･日常生活研究が進んでいること③朝鮮自身が、ウェブによって文化コンテンツを発信し始めたことなどが挙げられる。

朝鮮研究におけるこのような学界の傾向の中、本研究では朝鮮の文化、特に音楽分野に注目した。言い換えれば、本研究の目的は朝鮮における音楽政策の意味を明らかにすることにある。

朝鮮社会では、音楽は芸術領域や個人の趣味を越えたものとして非常に重要視されている。音楽政策は「音楽政治」と表現され、現在の体制でも継続・強化されている。音楽政策の研究は、朝鮮の政治社会的動向を直接的に理解する重要な要素・方途とさえいえる。

朝鮮社会における音楽のこのような位相を踏まえつつ、本研究では、①朝鮮の音楽政策を歴史的に分析する②音楽と「宣伝扇動」「プロパガンダ」を結びつける社会学理論を援用する③朝鮮の音楽政策を説明するモデルを構築する④現体制における音楽政策の特徴を分析し、③で構築したモデルの有用性を検証する、という方法によって研究対象に接近する。

個人研究

人口減少時代の地方都市・中山間地域の多文化化と地域振興に関する社会学的研究

研究代表者・准教授　徳田 剛
（地域社会学）

本研究の目的は、少子高齢化と国内外での人口移動の常態化により人口流失や地域住民組織の弱体化、産業の流出や衰退に悩まされがちな日本の地方都市や中山間地域に来住した外国人住民の現状と課題を明らかにし、彼ら・彼女らと日本人住民がともに地域社会を新たに創造し活性化させていくための指針を示すことにある。

日本国内の外国人住民の増加に伴う「地域社会の多文化化」という現象に関して、これまでの移民・エスニシティ研究の多くは、大都市インナーエリアに形成された中華街・コリアンタウンや、1990年代以降に製造業の集積地域などに形成されたブラジル・ペルーなど南米日系人移民の集住地域の事例研究を中心としたものであった。しかし近年では、外国人の来住者の増加は集住地域にとどまらず、地域住民の高齢化と（特に若年層の）人口減少が顕著な地方都市や中山間地域を含む、全国各地で見られる現象となっている。

そこで本研究では、そうした地域に分散して暮らしている外国人移住者・滞在者（具体的には地方部に来住した国際結婚移住女性、技能実習生、留学生など）の生活状況を把握し、移住･滞在先の選択や移動経路、社会関係や集団参加の状況、日常生活における課題等を明らかにした上で、彼ら・彼女の来住と定着、社会参加が地域社会にもたらす影響とその意義を明らかにする。最終的には、外国人住民を地域の貴重な人的資源と位置付けた地域振興モデルの構築を目指すものである。

－参考文献－

徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子、2016、『外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題―結節点としてのカトリック教会、日本語学校・民族学校の視点から－』創風社出版

個人研究

東南アジアサッカー市場における移民選手の戦略とネットワーク

研究代表者・教授　阿部 利洋
（社会学）

地域的な経済成長と若年層の消費市場参入を受けて、東南アジアのサッカー市場は、近年急速に拡大している。その動向は、外国人選手の新たな移籍先として脚光を浴び、また日本企業の積極的な投資先として浮上する形で現れている。従来、サッカー移民に関する社会学的研究としては、ヨーロッパ市場におけるアフリカ人選手を対象とし、移民の送り出し国と受け入れ国の経済格差とそれに起因する移民選手の否定的環境を批判的に検討するものが多かった。

I. ウォーラーステインや S. サッセンらの議論を参照する移民研究の枠組みでは、こうした選手は途上国から先進国へ流れる労働者と同様に認識され、その上でプロスポーツ選手という職業的性格から商品としての役割を課される存在として描かれる。つまり、グローバルなサッカー・ビジネスにおける南北格差の中で、10代の無名のアフリカ人選手は「生」の状態でヨーロッパのサッカー・アカデミーへ「輸出」され、そこでトレーニングを受け（「加工」され）、一握りのスター選手（「完成品」）は巨額の移籍金とともに「売却」されるが、その段階に至らなかった多くの無名選手は「廃棄」される。

その一方で、非ヨーロッパあるいは「南」の新興工業国におけるサッカー市場の拡充に伴い、そこで活躍する移民選手に関する研究が少しずつ現れ始めた。そこでは、移民選手は特殊技能を有する比較的自由な労働主体として描かれる傾向がある。本研究もこうした枠組みを共有し、（１）東南アジアという新興サッカー市場を取り上げ、（２）出身国のさまざまな移民選手に着目し、（３）彼らの能動的なサバイバル戦略と独特のネットワーク構築に焦点をあて、台頭する東南アジアサッカー市場の動態を実証的に描出することを目的とする。

個人研究

小規模小学校で活用できる体育教材の開発

研究代表者・准教授　高瀬 淳也
（体育科教育学）

我が国は、人口減少と少子化が進展し、2048年には総人口が１億人を下回るという予測がある（国立社会保障・人口問題研究所、2014）。現在、少子化の影響はすでに出始めており、平成25年度の調査では、全国の小学校のうち約４割は11学級を下回る小規模小学校となっている（文部科学省、2015）。地方自治体では学校の統廃合による学校規模の適正化を行っているものの、１つの市町村に小、中学校が１校ずつという最終段階に達した地域が多い。小学校の小規模化の歯止めをかける試みも限界に達していることを考えると、小規模小学校を対象にした研究は、今後ますます重要になると考えられる。

小規模小学校において、一番の課題となるのは、学習に適した規模の集団が形成できないという人数に関する問題であり、特に体育授業では、グループを編成して行う集団学習に制約が生じることが多い。しかし、小学校学習指導要領をはじめ、文部科学省が発行する指導資料などは、標準規模小学校を対象に記述されており、小規模小学校に関する記述は見られない。また、小規模小学校で開催される研究大会において、体育の授業が公開されることはほとんどない。このため、小規模小学校の体育授業に関する情報が教育現場には少なく、改善策を見いだせない実態がある。そこで本研究では、少人数でも可能な体育教材を開発・検証を行い、小規模小学校の体育授業モデルを構築することによって、小規模小学校の体育授業の改善に寄与することを目的としている。

個人研究

インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築

研究代表者・教授　福田 洋一
（仏教哲学（チベット））

インド仏教論理学の大成者ダルマキールティ（600-660）の第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』は、近年サンスクリット語原本が発見され、校訂テキストが刊行されて研究者の関心が高まっている。イン

ドで書かれた同書の注釈はダルモーッタラ（８c.）によるもののみだが、11世紀から仏教論理学の受容の始まったチベットでは、カダム派を中心に同テキストの研究が重視され、多くの註釈書が著された。しかし、それらの多くは、15世紀にゲルク派が成立したのち散逸したと考えられてきた。近年ラサのデプン寺で発見された大量の古写本の中に『ヴィニシュチャヤ』の注釈が７点含まれていた。これらの写本は草書体で書かれており、縮小印刷されて刊行されたので、文字の判読が困難であった。

本研究では、これらチベット仏教が11世紀から14世紀頃までにインド仏教論理学を受容していった時期の『プラマーナ･ヴィニシュチャヤ』の注釈書を対象とし、以下の３つの基礎資料を提供することを目的とする。

（１）テキストのデータをコンピュータに入力して公開する。

（２）入力したデータの横断的なKWIC検索を提供する。

（３）全ての『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』注釈書の科段を抽出・整理し、それぞれが注釈している原典の対応箇所を調査して、これらの科段対照表を刊行する。

本研究課題に先立って、平成26 ～ 28年度に研究代表者福田、共同研究者石田尚敬（愛知学院大学）による基盤研究（C）「初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究」の交付を受けており、カダム全集所収の論理学に関する文献24点のうち、主要な14点の入力を行い、他の論理学書２点を加え、KWIC検索サイト（http://tibetan-studies.net/tiblogsearch/）を公開した。これを踏まえて、本研究においては、さらにある程度学術的な校訂を経たテキストデータを提供し、また原典の注釈箇所を調査して、詳細な科段とともに対照表を刊行することによって、インド・チベット論理学双方の研究者が容易にチベット人の注釈書を参照できる資料を提供することを目指す。

個人研究

世親作『釈軌論』の総合的研究

研究代表者・講師　上野 牧生
（仏教学）

本研究は、５世紀頃のインド文化圏で活動した仏教僧ヴァスバンドゥ（世親）の手になる『釈軌論』の研究である。本書はふたつの内容を持つ。一方は（１）経典の語句を一語一句、精確に解釈するための方法の説明、すなわち経典解釈マニュアルである。他方は（２）その方法により明確化された経典の真意を一般民衆にわかり易く解説する専門的僧侶向けの法話集である。特にこの（２）は、インド仏教における専門的僧侶（説法師と呼ばれる）の養成に関する数少ない資料である。ゆえに本書は、（１）経典解釈法と、（２）それに基づく仏教教育・布教の伝統を担った人々の記録を残す最重要仏典のひとつと言える。５世紀以降、本書は教科書として広く用いられ、その伝統は中・後期インド仏教から現在のチベット仏教に至るまで踏襲されている。この点から、『釈軌論』の内容は汎用性が高く、通仏教的性格を持つことがわかる。

しかし、本書はこれまでほとんど研究の対象とされてこなかった。その最大の理由は、梵語原典が未発見であり、また漢訳もされなかったため、参照可能な一次資料が蔵訳に限られる点にある。さらに『釈軌論』が解釈対象とした阿含経典（説一切有部系）は、梵語・漢訳・蔵訳のいかなる言語においても完全には現存しない。そのため『釈軌論』の研究には、原典の不在と、解釈対象である阿含経典の原典の不足という、二重の困難が伴う。こうした要因から、本書の重要性は以前より認識されていたにもかかわらず、包括的な研究がほとんど存在しなかった。

こうした研究状況を承けて、本研究は、蔵訳『釈軌論』の批判的校訂テクストと、その全訳注の完成を目指す。この二点の基盤資料を完成させることにより、ヴァスバンドゥの経典観のみならず、仏教経典全般に関する新たな知見が齎されると予想される。

個人研究

「黒ノート」に依拠したハイデッガーのナチズム問題の再検討 ―メタポリティークを軸に

研究代表者・特別研究員　田鍋 良臣
（宗教哲学）

本研究の目的は、2014年に刊行が始まったハイデッガーの遺稿「黒ノート」に依拠して、従来問題視されてきたナチズムに対するハイデッガーの思想的なかかわりを再検討することである。「黒ノート」に関する代表者のこれまでの研究によって、ハイデッガーのナチズムとのかかわりは、およそ1930年代半ば以降に変化していることが明らかになった。その要因として想定されるのは、「メタポリティーク」と呼ばれる政治

－哲学的な構想の挫折である。本研究では、「黒ノート」に記されたこのメタポリティークの分析を軸に研究を進め、ハイデッガーのナチズムとのかかわりの変遷過程を通時的かつ包括的な仕方で明らかにする。

2017年度の研究ではまず、メタポリティークをハイデッガー哲学の一つの到達点として捉えるとともに、「別の始源への移行」という構想の原型として位置づけることで、ハイデッガーの思想動向におけるメタポリティークの意義を確認する。つぎに、メタポリティークが「学の変容」をも企図していることに注意し、そこにフライブルク大学総長時に取り組まれた大学改革の基本理念を探る。これにより、ハイデッガーがメタポリティークを通じて、ナチズム運動を別の始源への移行に方向づけつつ、ナチズムのいわば「存在史的基礎づけ」とでも言うべき政治－哲学的な構想を抱いていたことを明らかにする。そのうえで本研究は、この構想の具体的な内実を探るため、メタポリティークが「歴史的民族」に結びつけられている点に注目する。ハイデッガーはこの民族概念を「血と土」というナチス用語で特徴づけ、そこに民族の「必要条件」を見出す。この事実は、この時期のハイデッガーが自身の存在の思索のうちにナチズムを受容しようとしていたことをうかがわせる。本研究では、こうした民族主義的な概念と存在の思索との関係を精査することで、メタポリティークという試みのナチズム的色彩の強い内実を検討する。

個人研究

19世紀フランス詩における宗教的混淆―教育から文学創造へ―

研究代表者・任期制助教　塚島 真実
（フランス文学）

本研究は、高踏派からランボーにいたる作品におけるヘレニズムとキリスト教の混淆を明らかにすることを目的としている。

ランボーには多大な先行研究があるが、そこで欠落しているのが、ランボーが受けた学校教育に関する研究である。学校教育はランボーの詩的個性の形成に深く関わるものだが、直接ランボーに繋がる資料が僅少なため、本格的な研究はまだない。一方、ランボーが詩作の初期に多くパロディやパスティッシュに取り入れた高踏派については、彼らの作品においてヘレニズムの題材があまりに明示的に存在するがゆえに、その宗教的多様性と複雑性についてはこれまで十分に認識されてこなかった。本研究は、こうした19世紀後半のフランス詩の研究における欠落を埋めるものである。

中心的分析対象は、フランスの1850年代～1870年代の詩、特に高踏派とランボーの作品、および、これらの詩人たちの学校教育を受けていた時代の主要な学校教材に現れる神話的形象である。そして、以下の３点を目標とする。

（１）1830年代～1860年代に使用された代表的な学校教材に現れる神話的形象を分析し、キリスト教道徳へのギリシア古典の利用という観点から学校教材における宗教的混淆を跡づける。

（２）『現代高踏派詩集』、および高踏派詩人のうちルコント・ド・リール、バンヴィル、グラティニーの1850年代～1870年代に出版された詩集、ランボーの作品（主として1870年代前半）に現れる神話的形象の表象において、ヘレニズムとキリスト教の混在を明確化し、従来「断絶」という言葉で語られてきた高踏派とランボーのあいだに、宗教的混淆という点での連続性を確定する。

（３）以上の成果を踏まえて、ヘレニズムとキリスト教という一見対立するものの混淆が教育を通して矛盾なく受容されていたことを論証する。その上で、個々の詩人において、宗教的混淆がどのような創造的表現を獲得しているのかを明らかにし、19世紀のフランス社会に特有の多層的な宗教意識の解明に繋げる。

個人研究

東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明

研究代表者・特別研究員　清水 洋平
（仏教学・南伝仏教）

仏教における功徳の観念を具現する「積徳行」は、現在においても東南アジア大陸部や東アジア諸国に広く存在しており、功徳を積むことが善行の一つとして重視される。

東南アジア大陸部各地に根付いた積徳行は、功徳の観念も含め地域あるいは民族により多様性があると想定される。その宗教実践に着目することにより、各地域の社会と文化の特徴の一端を捉えようとする研究が社会学･歴史学の研究者を中心に行われている。一方、仏教学者は仏教文献を精査することにより、功徳の観念の研究を中心に行っている。

現在、こうした研究を通じて浮き彫りになってきた問題点は、現実にみられる功徳を積むという宗教実践

（現実相）と、積徳行の拠り所となる文献的根拠との間に乖離が少なからず存在し、現実相を文献的記述から明確に説明できないという点である。

この問題が生じる原因は、仏教学者が積徳行という宗教実践に対して、その文献的根拠を伝統的パーリ仏典(正典としてのパーリ三蔵及びその註釈文献)にのみ求め、それ以外のいわゆる蔵外仏典（東南アジア撰述仏典など)の存在を意識できていなっかたことにある。

よって、本研究では、16～19世紀の東南アジア大陸部：特にタイで発展し、独自に編纂された積徳行という宗教的実践を勧奨する文献であるアーニサンサ（その多くは未だ貝葉写本としてのみ存在する）を考察し、①ほとんど知られていなかった同文献群の全体像を把握すると共に、②伝統的パーリ仏典と対比・校合しアーニサンサ文献のパーリ仏典史上における変遷・発展の体系的解明を行う。

これらを通じて、東南アジア仏教を知る上で最も重要な概念である積徳行について、その実践を説くに当たり、教理的な根拠として援用したパーリ仏典上の対応する文節を文献学的に明らかにする。同時に、東南アジア仏教で強調される積徳行に対して、その行為の支柱となる同文献の撰述意図、すなわち出家者側のリアルな現実社会への対応の姿を読み解くことで、汎仏教文化圏における「積徳行」の総合的な研究の一視座を示したい。

個人研究

『甚深伝』校訂と解釈による ミラレーパの仏教思想の解明

研究代表者・特別研究員　渡邊 温子
（仏教学・チベット学）

本研究の最終的な目的は、ミラレーパの仏教思想を再構築し、彼の思想を解明することを通じて、チベット仏教後伝期における仏教開花についての基盤研究を提供することである。上記の目的を達成するために、現存する諸ミラレーパ伝の原型である『甚深伝』（*rje btsun chen po mid la las, pa'i rnam thar zab mo*）を研究対象とし、現在入手・閲覧可能な写本を用いて①校訂本の作成、および②翻訳研究を通じた文献分析により新たな研究モデルを構築する。

校訂作業を遂行するにあたり、現在アクセス可能な『甚深伝』の写本は、（1）オックスフォード写本（2）ニューアーク写本である。ストックホルム民族博物館にも写本が保存されていたようだが、現時点ではアクセスが不可能となっている。以上に加えて、チベットのゴンカルチューデとニャロンに写本が存在するとの情報があるが定かではない。そのため、まずオックスフォード大学、ニューアーク博物館から複写資料を取り寄せるとともに、中央チベットと東チベットにて現地調査を行い、写本収集にあたる。写本資料を収集した後、2011年に北京から出版された『甚深伝』を底本として、校訂作業を行い、『甚深伝』批判校訂版の完成に向けて準備を行う。資料収集と校訂の成果である信頼度の高い文献を熟読し、ミラレーパの思想体系を体系的に記述する。そのために『甚深伝』の校訂作業と並行して、『甚深伝』を綿密に読み込み、正確に日本語へ翻訳を行う。ミラレーパの宗教歌が難解なことに加えて、伝記にも作成地の方言と思われる表現が見られるため、正確な意味を把握することは容易ではない。そのため他の研究者と意見交換を行いながら研究を進める。

また、資料収集・校訂・翻訳の課程で収集されたチベット語の難語の情報をチベット語オンライン辞書に提供して共有する。

個人研究

省察的実践者としての 社会福祉専門家像の再構築に 関する臨床研究

研究代表者・講師　大原 ゆい
（社会学）

本研究は、福祉専門家を医師や弁護士など技術的合理性（technical rationality）を根本原理とする技術的熟達者（technical expert）に対置する省察的実践者（reflective practitioner）として位置づけ、個人化社会における連帯のあり方に焦点化しながら、福祉専門家像の再構築を目指す。ともすれば従来の社会福祉制度ではその網の目からこぼれ落ちてしまっている今日的な福祉問題に対応すべく実践に携わるソーシャルワークの展開プロセスを暗黙知と形式知の相互交換運動に着目して分析する。

本研究のテーマの柱のひとつである「専門家」は、近年、その実践と責任と倫理が問われている。これは福祉領域にかぎったことではなく、司法、教育、医療などあらゆる領域で従来の専門家像が揺らぎ、今日的なあり方が模索されている状況である。今後ますます

高度化し複雑化することが予測される社会においては、専門家の実践の越境性と複合性を強め、知識と技術と見識の総体にわたるパラダイム転換が求められる、つまり新たな専門家像の構築が必要な状況であると考える。

具体的な研究方法としては、福祉専門職養成の教育現場と福祉の実践場面において、テキストマイニングを活用したデータ解析、フィールド調査、インタビュー、ケーススタディなど質的調査および量的調査を含めた臨床研究方法を採用し分析を行う。とくに「専門職養成教育プログラムの実態を明らかにすること」「現職の福祉専門職の実態を明らかにすること」「地域をフィールドにした福祉実践の把握から明らかにすること」の3点を中心に、教育現場、実践現場を研究フィールドとして理論と実証の往復作業を展開させ、今日的な地域における福祉課題を担いうる福祉専門家像を明らかにする。

海外学会参加・研究調査報告

『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway
修士課程真宗学専攻第二学年　和田 良世
修士課程真宗学専攻第二学年　鶴留 正智

2017年３月に真宗総合研究所研究所は、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と龍谷大学世界仏教文化研究センターと三者の学術交流協定を結び、『歎異抄』の注釈史に関して５年間の共同研究プロジェクトを始めた。その協定に基づき、これからの５年間、毎年２回、大学院生から大学教員までの幅広い層の方が参加できる英語による研究ワークショップを開催し、『歎異抄』の解釈の歴史が読み取れる詳細な注釈を加えた『歎異抄』の英文翻訳研究書を作成することに向けて、注釈書を精読し、研究発表を行っていく予定である。毎年の３月にはカリフォルニア大学バークレー校がホスト校となって開催し、８月には京都で、大谷大学と龍谷大学が交互にホスト校となり開催していくことで合意している。

上記の翻訳研究書に加えて、協定校に留まらず、日本国内外で仏教、とりわけ真宗について関心を持っている大学院生の交流と相互研鑽の場を設けることによって、英語圏において丁寧なテキスト解読を中心とした文献学的手法による仏教研究・真宗研究を展開し得る次世代の研究者の育成も、ワークショップ開催の大きな狙いである。そこで本学では、参加学生を公募し、応募者の中から第一回のワークショップに参加する二人の大学院生を選抜した。

第一回のワークショップは、2017年３月25日㈯から27日㈪まで、バークレー市内の浄土真宗センターで開催された。三日間を通して、異なるバックグラウンドを持つ約30名が集まり、江戸期の『歎異抄』の注釈書を読み、英訳作業を行った。

25日に全体で集まり、マーク・ブラム教授（カリフォルニア大学バークレー校、英米班嘱託研究員）がワークショップ開催の趣旨説明を行った上で、三つの作業部会に分かれて、円智の『歎異抄私記』（1662年）、寿国の『歎異抄可笑記』（1740年）、香月院深励の『歎異抄講義』（1801－８年）の英訳に取りかかった。二日目の昼には、参加者による研究発表が行われたが、今回のワークショップでは翻訳作業が中心となった。最終日の午後には、各部会から、成果報告が行われ、それについても全体で活発な議論が交わされた。

以下に本学の学生参加者の報告を紹介する。

文学研究科修士課程真宗学専攻第二学年の和田良世氏の参加報告は以下の通りである。

私のワークショップ参加報告として、参加した翻訳部会の概要と、全体を通しての所感を簡潔に述べさせていただきたい。

私の参加した翻訳部会ではカリフォルニア大学バークレー校のマーク・ブラム教授の指導のもと、『歎異抄私記』の英訳に取り組んだ。ブラム教授のほかに、同校の学生や浄土真宗センター関係者、そして私を含む日本人学生（龍谷大学・大谷大学）が各２～３名ずつ集っており、計10人程度を基本メンバーとして進められた。国籍・性別・年齢に偏りがなく、それぞれの立場から様々な意見が出され、活発な部会となった。

翻訳作業は、学生が順に下訳を発表し、他のメンバーがそれに対して改善点を挙げ、全員での議論を経て最終的な訳を決定していくという手順で行われた。テキストは円智による1662年の書で、『歎異抄』に対する随文解釈であるが、今回翻訳が完了したのは本書の始めから『歎異抄』序文に対する解釈までの範囲である。

今回の部会では、原文・訳文の両方に対して各表現の持つ辞書的な意味に留まらず、言語的及び教理的観点から見たニュアンスまでもが考慮されて作業が行われた。部会はそれぞれ日本語あるいは英語を第一言語とし、かつ日本古典や仏教を研究する立場にある参加者で構成され、一語一語に対して詳細な検討が加えられた。そのため、原文に忠実にして自然な翻訳が、かなりの高水準で実現されているように思う。一方で、こうした成果とひきかえに、作業の進行が遅くなってしまうという課題も見えてきたが、次回以降は作業内容の明確化や参加者の下準備などにより大幅に改善が見込めるはずである。

さて、今回の参加を通して私が非常に強く感じたのは、真宗学、あるいは浄土真宗を対象とする学問領域を国際的に開いていくことの重要性である。実は今回、

『歎異抄』に関するワークショップでありながら、日本人参加者を除けば、浄土真宗や親鸞思想を専門的に研究対象とする参加者はほとんどいなかった。真宗関連の研究には、日本とは異なる文化、価値観、そして学問的背景を持つ海外研究者を巻きこんで、より多角的に研究されるべき余地が多分にあるといえる。国内研究者の研究関心だけでは光が当てられず、これまで重要視されてこなかった研究方法や対象がまだまだ残されているのではないかと感じる。

たとえば、今回翻訳対象となった江戸期の典籍の多くは、いまだ日本語による現代語訳がなされていない。当然、比較的現代語に近い言葉で書かれているからと思われるが、やはりそのせいで、現代語の諸研究に比して参照されにくい感は否めない。そのような状況の中、今回のように英訳を通してそれらが海外の研究者に広く認知されるようになれば、それに触発されて、国内でも注目を浴びる資料となるかもしれない。そうなれば、近年の研究に再検討が迫られ、国内外問わず研究がいっそう深まっていくはずである。

したがって、さらなる真宗学の深化、展開を見据えたとき、私も含めて真宗学に籍を置く者にとっては、未解決の課題の探求はもちろんのこと、これまで真宗学内部に留まりがちであった知見を積極的に外部に発信していくことも強く要求されてくるように思う。

文学研究科修士課程真宗学専攻第二学年の鶴留正智氏の参加報告は以下の通りである。

私の参加した翻訳部会では、寿国『歎異抄可笑記』を英訳していった。参加者は、日によって多少の変動はあったが、日本人がおよそ四名、アメリカ人がおよそ四名である。龍谷大学の嵩満也教授がこのグループの指導にあたられた。

この部会の最大の特徴は、底本である『歎異抄可笑記』が版本ではないということである。そのため、ところどころ判別しづらい文字が存在した。そこで、まず日本語を母国語とするものが中心となってこれを解読した。たとえば「也」などはくずし字、「コト」は合字、「承」は俗字になっているので、それを現代で通じる文字に改めるという作業である。さらに、とくに近代以前の日本語は主語が明確でないことが多いため、主語が何にあたるかということを簡単な英語で説明し確認することが必要であった。ただ、原文が句読点のない文章なので、これもなかなか容易ではなかった。

そこで、翻訳作業の効率化をはかるためにGoogle Docsを用いることになった。これにより、ウェブ上で同時編集できる機能を活かして、全員がインターネットに接続しながら活字化したテキストと訳を確認できるようになった。このような方法を用いても、日本語の句読点と英語の句読点（punctuation）を比べると、前者が比較的自由につけられる（たとえば読点が、主語と述語を分ける際にも用いられ、等位や、副詞句的用法としても用いられるという特徴を持つ）のに対して、英語は比較的制約があるため、口頭での説明も必要であった。こうした翻訳作業を通して、自然な英語の訳文にするためには英語ネイティブの助けが必須であることを痛感した。

アメリカの研究環境では、みな当たり前にパソコンを打ち、インターネットを使って同時に資料を共有する。日本でもそれなりの環境は整っているはずだが、とくに真宗学では、授業や研究会でパソコンを開いている学生は稀である。まして同時にインターネットで資料を共有するという機会はほとんどない。インターネット上にはSATなどの便利なデータベースもあるし、手持ちの資料をスキャンあるいはデータ配付することで資源の節約にもなる。ぜひすすめていくべきだと考えるが、日本、ことに本学の状況を鑑みるとすぐには難しいだろうと感じる。

英語については難しいところもあったが、日本語を母国語としない人たちが真剣に日本の文化を学ぼうとしている姿にふれると、もっと英語を勉強しようという意欲が出てきた。浄土真宗もその伝統を遡れば、はるか西の、言語も文化も違うところにルーツを持つのだから、日本だけのものではなく、外国でも学ばれるべき宗教思想である。しかし、英語話者に日本語習得を求めるのはハードルが高い。日本人でさえ読むのが容易でない近世の日本語テキスト読解力を外国の読者に期待するよりも、英語を話せる日本人研究者を増やす方が現実的であると思う。そもそも広い世界に向

ワークショップの全体会の様子

かって日本の宗教思想を紹介するためには、英語の学術書がもっと必要である。

今回のワークショップ参加を通して、日本の真宗研究者がアメリカの先進的な教育環境を体験すること、そこでさまざまな言語・思想・文化的背景をもつ人たちと真宗について議論することは、これからの真宗学にとって重要な意味をもつと感じた。

以上のように、参加した二名の学生は、このワークショップから様々な刺激を受け、真宗学の研究に取り組むための新たな視点を得るなど、今後の研究に大きく貢献する成果があった。

第二回のワークショップは、本学を会場に2017年８月４日㈮から７日㈪まで開催される予定である。海外から参加する大学院生にとっても、本学の学生にとっても、刺激的な学びの場となることが期待される。

ワークショップ参加者の集合写真

アメリカ哲学会（American Philosophical Association）参加報告

国際仏教研究（英米班）特別招聘者・准教授　田中 潤一

2017年３月１日～４日、アメリカ合衆国ミズーリ州カンザスシティにおいて開催されたアメリカ哲学会中部大会に、マイケル・コンウェイ研究員（真宗学科）と田中潤一特別招聘者（教育・心理学科）が発表者として参加した。アメリカ哲学会の中に国際仏教哲学会（International Society for Buddhist Philosophy）の発表部会が設けられ、３月１日のBuddhist Perspective of Pedagogyの部会で田中特別招聘者が発表し、３月２日のPure Land Buddhist Thought and Actionの部会でコンウェイ研究員が発表した。

コンウェイ研究員は“Past Karma and Radical Responsibility in the Thought of Soga Ryōjin”のタイトルで発表を行った。近代真宗教学の大成者・曽我量深の「宿業」論について詳細な考察が行われた。まず「宿業」概念について「運命」概念との比較から、定義づけが行われた。運命は知的立場から行われる冷徹な概念であるのに対して、「宿業」は直観や感情の次元で人間に自覚される。宿業の自覚によって、人間は世界との関係を自覚し、如来の慈悲を感じ、希望を感じることができる。ここから次に曽我の「責任」論へと議論が進められた。我々は宿業の自覚によって、我々の身体が過去の無数の因縁によって生まれて来ていることを認識する。このように「宿業」と「責任」について詳細な考察を行った上で、曽我が戦後に、「正報」・「依報」の概念と「共業」・「不共業」の概念と関連付けて、宿業について考察を展開していることが指摘された。このように宿業の自覚によって、人間は如来の大悲を認識するだけではなく、その大悲の眼差しを通して、一切衆生を眺め、如来の誓願に直参すると曽我は言う。それを受けて、本発表では曽我における「宿業」概念が、人間の業の共通の側面を強調し、大乗の菩薩の慈悲の精神の重要性を指示しているため、現在、仏教倫理学について英語で展開されている議論に貢献できるということが提言された。

田中特別招聘者は“The Possibility of Teaching the Spirit of Buddhism ―From the Standpoint of Tanabe Philosophy―”のタイトルで発表を行った。近代日本の哲学者・田邊元の哲学から仏教教育の可能性が探求された。まず田邊の主張する「懺悔道の哲学」から、人間一人ひとりが内省し、その内省を現実世界の「行」に転じていくことの意義を論じた。さらに田邊が宗教を個人の救済の問題としてのみならず、理想社会の構築に関係づけていることを検討した。田邊によると、一人ひとりが独立（分立）していることによって、真の共同体が構成され、その共同体そのものは「如来」と名付けられる。さらに現在の世俗的で宗教的中

参加者を囲んで発表するマイケル・コンウェイ研究員

発表する田中潤一特別招聘者

立であるべき公教育においても、仏教哲学の諸概念が寄与するところが多いと考え、①心、②行、③言葉、④共同体形成の４点から考察を行った。とりわけ仏教教育は、内面の救済のみならず社会・共同体形成に寄与する可能性がある点を指摘し、仏教教育の現代的意義を指摘した。最後に、教育における言葉の可能性について、浄土教と真言密教の言葉観を比較しそれぞれの教育における可能性を提示した。

以上本研究所からの発表者の発表概要であるが、発表部会の参加者から活発な質疑応答が行われた。議論の質は極めて深く、アメリカにおいても浄土教思想や仏教教育への深い関心がうかがえる発表であった。

中国社会科学院歴史研究所出張報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授　井黒 忍

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、2017年３月７日㈫に大谷大学より２名の研究者が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表および討論を行った。発表者と発表テーマは、井黒忍（大谷大学准教授）「近世・近代華北の水利権売買に関する一考察：山西・陝西・河南の事例に基づいて」、濱野亮介（大谷大学任期制助教）「明代民間死者儀礼と国家－仏教「瑜伽（教）宗」に関する整理と課題－」である。

2017年３月５日㈰に北京に到着した後、３月６日㈪に中国国家図書館において資料調査を実施した。井黒は河南省の地方志や水利に関する現地調査報告書などを閲覧した。濱野は明代初期大理地方の阿吒力教関係の資料調査を行った。大理国では阿吒力教と呼ばれる独特の仏教教派が栄えたが、明朝の統治下に組み込まれた後は、阿吒力教と明朝の仏教統治の融合が見られ、他の地域にはない独自の宗教習俗が生まれた。日本の研究機関や図書館には所蔵されていない、雲南省図書館が所蔵する阿吒力教資料の影印本（『大理叢書・大蔵経篇』民族出版社、2008年）を閲覧し、特に洪武35（1402）年の紀年を有する「無灯遮食法会儀」の写本が洪武時期の宗教儀礼の実例として非常に有用なものであることが確認できた。

３月７日㈫には中国社会科学院歴史研究所において研究発表を行った。それぞれの概要は以下の通りである。井黒は明清時代における水利権売買について発表した。16世紀後半に顕在化した地権と分離した水利権の単独売買は、賦税の確保を目的とした明朝政府の禁令にも関わらず、さらなる広がりを見せていく。水利権売買は理念的には水資源の過不足を調整し、最大限に有効利用するための方法となり得るものであったが、実際には経済的強者による水利権の集積と弱者の水利権喪失を生み出すに止まらず、水券や水契といった証書や契約書自体の売買など商品化の進展にともない、村外へ水利権が流出し、村の割り当て水量が減少するという弊害を生み出すこととなった。

18世紀頃からは村や村落連合は渠長らが代表する水利組織を介して水利権の売買契約に関与するケースが確認できるようになる。特に個人と個人が所属する村との間、あるいは同一水源を共有する村落連合を形成

する村と村との間での契約や「売地不帯水」などの規定を設けることで水利権の外部への流出を抑制する方向での動きが強められる。これは地域社会が水利秩序を維持するため、その売買契約者の範囲を制限することにより、市場メカニズムによる水利権の売買や水の商品化という動きを抑制することを図った試みとみなしうる。

濱野は明代初期における民間死者儀礼と国家の宗教管理について発表した。明朝の創立者である太祖は、城隍・祭厲制度などによって孤魂に対する儀礼を制定したが、その一方で、一般の死者儀礼に対する政策をも同時に進めた。太祖は現在の死者儀礼については道教と仏教がその主要な位置を占めるとし、仏教に対しては新たにそれら儀礼を扱う分類として「瑜伽（教）宗」を設定し、道教に対しては自らの考えを反映できるような状況を作った上で「大明玄教立成斎醮儀範」を編纂させ、教団の正式な儀礼書として使用させた。これらの内容については、仏教や道教の研究といった視点からのみ論じるのではなく、宗教（教団）史、儀礼史、絵画史など関連する諸分野の視点を横断的に見ていくことが重要であることを指摘した。発表の後には参加者の間で活発な討論がなされ、有意義な研究交流の機会となった。３月８日㈬に北京より帰国した。

中国蔵学研究中心出張報告

西蔵文献研究　研究代表者・准教授　三宅 伸一郎

2017年３月24日から３月27日までの間、研究員・上野牧生とともに、中国・北京に出張した。今回の出張の主たる目的は、中国におけるチベット学の拠点である中国蔵学研究中心を訪問し関係者と面会、今後の研究交流に向けた話し合いをすることであったが、同時に、中国蔵学研究中心を含めた中国・北京に存在する研究機関に在籍するチベット学者らと面会し、最新の研究成果に関する情報収集にも努めた。以下、日程に沿って今回の出張の報告をおこなう。

2017年３月24日：NH979便にて北京国際空港へ。空港到着後、タクシーにて北京市内へ向かい、北京に先着していた松川所長（当時）と合流、中国蔵学研究中心に向かう。中国蔵学研究中心では、総幹事のダムドゥル氏、科研辦副主任・国際合作与交流処所長の黄文娟氏、宗教研究所研究員で本学で博士の学位を取得した李学竹氏と面会。李氏の通訳にて今後の学術交流について話し合う。ダムドゥル氏よりは、学術交流に対して極めて前向きな発言があった。黄氏より事務的な視点から、「総合協議書」を作成する方が良いだろうとの提案があり、今後この「総合協議書」作成のための協議を行うこととした。また、10月ないし11月に訪日するので、そのための招聘状の作成など便宜を図って欲しい旨申し出があった。さらに黄氏からは、研究交流の中で人材の育成を重視しているとの表明があり、研究交流を継続する具体的な手段として、日中チベット学セミナーの開催をしてはどうかとの提案があった。夜は、李氏と会食しながら中国蔵学研究中心におけるサンスクリット写本研究の現状について情報を聞いた。

中国蔵学研究中心全景

2017年３月25日：午前、北京にあるチベット仏教寺院・雍和宮を見学した。午後、夕刻より中国社会科学院世界宗教研究所のガザンジャ氏・中国蔵学研究中心宗教研究所のデフジジョマ氏夫妻宅を訪問し、デフジジョマ氏手作りのチベット料理の夕食を共にしながら、中国社会科学院や中国蔵学研究中心におけるチベット仏教研究の状況について情報を聞いた。ガザンジャ氏からは、近著『中国蔵伝仏教』（北京：中国社会科学出版社、2015年）の寄贈を受けた。要を得たチベット仏教概史である同書は、帰国後、大谷大学図書館に設置した。

中国蔵学研究中心幹部・関係者との会見後記念撮影。
右より：宗教研究所研究員・李学竹氏、松川所長（当時）、
総幹事・ダムドゥル氏、三宅、上野、
科研辦副主任・国際合作与交流処所長・黄文娟氏

2017年３月26日：上野は、中国蔵学研究中心宗教研究所でサンスクリット語写本を研究するルモツォ氏の案内で故宮を見学した。三宅は、午前、中国蔵学研究中心西蔵文化博物館のリンチェン・ジョマ氏に会い、美術やポン教、古文書研究に関する相互の研究状況について情報交換をおこなった。昼には中国蔵学研究中心宗教研究所のラシャムジャ氏と昼食を共にしながら中国蔵学研究中心におけるチベット仏教研究の状況について情報を聞いた。夜は、中央民族大学蔵学院のツェリンタル氏と会食、相互の研究――とりわけポン教研究に関する――状況について情報交換をおこなった。

2017年３月27日：午前、民族出版社および中国蔵学研究中心内の書店にてチベット語やサンスクリット写本に関する資料を収集した後、タクシーにて北京国際空港へ向かい、NH980便にて帰国した。

ノペのライフ・ヒストリーにみる キリスト教会と生活の関連

東京分室PD研究員　田崎 郁子

2017年２月に東京分室の指定研究の研究活動の一環として研究員３名でタイ北部を訪れた。調査地は少数民族であるカレンの村落と仏教寺院であり、その目的は、第１に、キリスト教徒の多いカレン村落と精霊信仰の多いカレン村落を対比させながら、キリスト教の人々への影響を考察すること、第２に北タイの仏教寺院で出家者や在家者とともに生活することによって、地域社会と寺院との濃密な関係を捉え、日本の仏教と比較すること、である。タイ語もカレン語も話せない研究員を伴ってのカレン村落訪問だったので、ホストファミリーが私一人の時とは比べものにならないほど世話を焼いてくれたのだが、中でも就寝場所から食事から車の手配まで配慮し、インタビューに同行してくれたのがノペ（仮名）である。

ノペは1983年生まれの女性であり、私のホストファミリーの息子と結婚している。私がボーケーオで調査を始める以前に10か月ほど調査滞在していたメーホンソーン県のD村出身で、私とは10年以上の長い付き合いだ。今回はノペのライフ・ヒストリーを手短に紹介することで、彼女の生活の中で教会やキリスト教がどのような意味を持つものなのか、考えてみたい。

ノペは７歳の時に同じ村の女児３人（７歳～９歳）と共に親元を離れて、他県の学校に併設された寄宿舎で暮らし、大学まで進学した。ノペの出身村D村は、北タイの中心都市チェンマイから公共交通機関で丸一日（当時は２日間）もかかる辺鄙な山奥に位置し、1990年前後であっても小学校には教師が週１日来るか来ないかといった状況だった。稲作を主な生業とし、村人の多くは小学校４年を終えると一家の働き手となり10代で結婚する。当時、民族教会組織であるタイ国カレン・バプテスト会議（以下TKBC）で働くD村出身の男性が、就学困難な村人に教育の機会を提供しようとTKBCから寄付を取り付け、ノペをはじめ４人の少女がはるばる遠くの小学校まで就学することとなったのである。ノペは泣きながら両親と別れ、茶色にうす汚れた白いワンピースの民族衣装１着だけの、着の身着のままふもとの町からバスに乗せられたと当時を述懐する。小学校に到着し、タイ語のまったく分からぬ４人は、学校が終わってから毎晩先生がつきっきりになってくれ、タイ語を必死で勉強したという。

中学卒業後、TKBCによる就学費・寄宿費の全額支援のもと、北タイにおいて伝統と格式で最も有名なミッション系私立ダラー高等学校への進学機会を手にし、ノペはチェンマイの上流社会を垣間見ることとな

る。その後首都バンコクの私立大学へ進学し、神学を学んだ。教会関係者から個人的な寄付を受け、また奨学金とクリーニング店でのアルバイトを活用して、カップラーメンをすする貧乏暮らしながら楽しかったという。彼女の大学時代、私はD村での調査を始めた。黙々と働く村人と違って、長期休業期間＝稲刈りの農繁期に帰省すると農作業もろくにせずに（村で暮らした経験がほとんどないためできないのである！）おしゃべりに明け暮れるノペに、私はあきれ半分、その社交性の高さに驚き半分といったところだった。今は彼女の社交性の高さは、幼少期から親元を離れ言語も異なる見知らぬ環境での生活で身につけた術であろうことが容易に想像できる。人に嫌な気持ちを抱かせることなく、村や学校での様々な出来事を面白おかしくにぎやかに語るノペの話は、今も魅力的で人を飽きさせない。人の手を借りる際、迷惑をかける際には配慮を怠らず、私などはその口車に乗せられて彼女ノペについつい何かしてあげる羽目になっているのだが、いつも「またノペにやられた！」と思いつつも悪い気は決してしなかった。

D村のような辺鄙な山奥の村落出身者は経済的困難を抱えながら都市部へ進学することが多い。彼らは、家賃と食費が無料になる仏教寺院に住み込みながら、あるいは教会関連宿舎を利用したり大学の農園に住み込みで働きながら、また友達の宿題を一手に引き受けアルバイト代を稼ぎ貧しいことの象徴であるバナナばかりを食べながら、奨学金となけなしの親からの仕送りを併用してようやく月５千バーツ（１万５千円）ほどの最低限の生活費と学費を工面する（多くのタイ人学生がアルバイトもせず遊びに明け暮れるのとは対照的である）。町に出てきた当初、銀行口座の開設方法が分からずに困って私に電話をしてきた人、食べ物に困らないようにと村から米を50キロも担いで来た人、心配だから国立病院まで付き添ってくれと頼みこんできた人など皆程度の差こそあれチェンマイで右往左往するのだが、そんな彼らの多くは根を上げずにいつの間にかしっかりと町の暮らしに馴染んでいくのが印象的だった。

さて大学に進学したノペは神学を専攻する。彼女の家族はクリスチャンで、父親はTKBCの運営する地方の宿舎で働いた経験も持つ。幼心にノペは、教会での仕事ばかりで村にほとんど帰らない父に不満があり、なぜ父は神様のことが最優先なのか、なぜ神様の仕事のためならばどこへでも厭わずに出かけていくのか不思議だったという。そうまでして父が敬愛している神について知りたいと思い、神学を選んだそうである。神学を専攻すると伝えたときの父は泣いて喜び、ノペはむしろそんな父の姿に戸惑いを感じた。

このように幼少期から教会に通いキリスト教に慣れ親しんでいたノペだが、本当の信仰に目覚めたのは大学時代だったという。入学当初の彼女は、神を信じていないわけではないけれど本当に観照したわけでもなかった。神を求めはするが、神とは何なのか分からず、そのような状況での神学の勉強はむしろ苦痛でさえあった。神が自分を必要としないのならば、もう大学を辞めさせてほしい、と祈ることも度々だったという。そして３年目にしてようやく神を観照した。同期の30人ほどの学生はどんどん退学していく中で自分が残ったときに、神が自分をそうさせたのだと思うようになった。なにか神と遭遇するようなはっとする経験をしたわけではないが、このような自分の変化をノペは「神を観照するようになった」と表現した。

大学卒業を控えた頃、就職先としてバンコクの教会の副牧師になるという選択もあったが、ノペはどうしても北部に戻ってカレンの中にとどまり、使徒として働きたいと願った（首都バンコクの教会では信徒はタイ人、華人の割合が多くなり、直接カレンのために働くという風には捉えられない）。そんな折、ノペは教会活動の中でボーケーオの日曜学校長と出会い、インターンシップで２か月ボーケーオに滞在する機会を得て、最終的に北部山地のボーケーオで日曜学校常勤スタッフとして就職することになった。ノペのように、苦労を重ねて大学へ進学したことから、貧しい山地の暮らしの発展のために働きたいと考える山地出身者は多い。都市部で就職することが可能な高学歴者が、なお山地にこだわり山地の暮らしのために働く、その時の受け皿としても、教会組織は機能する。

教会関連の仕事は、公務員のような高給でもなければ社会保険が整っているわけでもなく終身雇用でもないのだが、ノペは使徒として働き神の傍らに居て神を観照することのできる職であり、幸せを感じていると言い、特に子どもや若者に神様のお導きについて教えたいと考えている。ノペは日曜学校スタッフとして週３回開催される夜の祈祷会に参加するうち、毎晩祈祷会会場となる家までバイクで送迎してくれた教会青年会会長の男性と親しくなる。村人に「夜な夜な二人で会っている」などとよからぬ噂を立てられたため、結婚を決意するに至った。私は彼女の結婚式でボーケーオを訪れ、この地で調査する運びとなったのだった。

７歳にして親元を離れたノペは、寄宿舎暮らしが長かったため家事のイロハが全く身についておらず結婚当初苦労するのだが、結婚を機に姑からカレンの代表

的な料理や主婦としての家事、育児を習い、今では立派に二児の母親を務めている。義理の家族とも故郷D村の両親とも良好な関係を築き、ボーケーオに一戸建てを建て終わると毎年２回はマイカーで家族そろってD村へ帰村する。大量の土産と村人が驚くほどの教会献金を携えての帰村を、ノペはいつも嬉しそうに少し自慢げに報告し、まだまだ経済的自立が叶わず社会との接点の乏しい私には羨ましい限りだ。

ノペのライフ・ヒストリーをたどっていくと、人生の主要な場面において常にキリスト教との関係の中で選択の方向付けがなされていることが分かる。あるいは、ノペ自身が彼女の人生をそのようなものとして位置づけ私に語っている、と捉えることもできる。そこでは、キリスト教あるいは教会は、私たちがいわゆる「宗教」という言葉で想定する、個人的な内面の信仰に限られたものではない。ノペの事例にみられるように、信徒にとっては、就学機会の提供から、就職、結婚など人生の様々な選択が教会コミュニティを基盤としたネットワークの中で展開されるのであり、そのネットワークは故郷を遠く離れた都市部においても信徒と故郷/山地との紐帯を確保するものとなっている。ここでキリスト教は、社会関係や経済など他の領域とも相互作用の中にあり、生活そのものなのである。

ノペと知人の結婚式に参加する共同研究グループ

韓国外国語大学哲学部主催の招待講演報告

東京分室PD研究員　松澤 裕樹

2017年２月５日～７日にかけて韓国出張を行った。出張の目的は、２月６日に韓国外国語大学ソウルキャンパスで開催される韓国外国語大学哲学部主催の公開講演会“Buddhism and Western thought”にゲストスピーカーとして出席することであり、また、韓国外国語大学哲学部の先生方と学術的交流を行うことであった。

６日午前に空港到着後、韓国外国語大学のKwon Young Woo教授と共に韓国外国語大学龍仁キャンパスに向かい、キャンパス案内と哲学科の先生方の紹介を受けた後、講演会場である韓国外国語大学ソウルキャンパスへと向かった。講演題目は“A way to self-knowledge: Zen-Buddhism and Meister Eckhart”であり、盤珪禅師の『十牛図』における悟りへの階梯と中世キリスト教神秘思想家マイスター・エックハルトのドイツ語説教における悟りへの階梯を比較するという内容で約一時間講演を行った。事前の話では、質疑応答の時間が一時間設けられているとのことだったが、結果的に、聴衆の先生方や大学院生たちとの白熱した議論により、質疑応答は二時間に延長された。続く夕食会でも活発に議論は行われ、非常に有益な学術的交流をすることが出来た。７日には、再び韓国外国語大学龍神キャンパスで哲学科の先生方と交流し、更に学術的交流を深めていくために大谷大学と交換留学制度を始めとする学術提携を行う可能性について話し合われた。

韓国外国語大学ソウルキャンパスにおける発表の様子

国内研究調査報告

教如上人関係史料調査報告

2016年度指定研究　教如上人研究　研究員・講師　川端 泰幸

2016年度後期、教如上人研究班では３回の史料調査を実施した。いずれも研究課題である教如上人関連史料を所蔵する寺院に赴いての調査である。

【東光寺調査　2016年９月10日㈯】

京都市下京区に所在する東光寺での調査を実施した。教如上人直筆の消息や御影などは確認できなかったが、教如上人の伝記ともいうべき、『本願寺御由緒略記』などの由緒関係史料を調査することができた。東光寺そのものの由緒についてはこれまで不明な点が多かったが､近代の本堂再建にあたって記された『寄附帳』冒頭の記述などから、開基が了海なる人物であり、教如上人に付き従っていた側近であることが明らかになった。また、了海は、特に教学の方面で才能を発揮した人物であったと伝えられており、教如上人の側近が開基となった寺院の特質を把握することができた。

【徳正寺調査　2017年３月14日㈫】

京都市下京区にある徳正寺において調査を実施した。徳正寺は、本願寺第８代蓮如上人に帰依した井上願知という僧を開基とする寺院としてよく知られているが、今回の調査において、その存在の重要性がより一層明らかになったといえる。調査を進める中で、教如上人が授与した親鸞聖人御影、蓮如上人御影、また教如上人の消息など多数の史料が遺されていることが判明した。例えば、徳正寺第５世祐誓の妻であった妙正尼という人物が戦国大名の血縁を引いていることや、その所縁から、東本願寺第13代宣如上人の継職を徳川幕府と交渉して、後押ししたことなど、これまで伝承として伝わっていたことが、事実であるという確信を得るに至った。そのような意味で、徳正寺史料は真宗史のみならず、日本中近世史全体にも大きな影響を与えうる可能性のある性格をもっていることが見えてきた。

徳正寺本堂での調査風景

【妙蓮寺調査　2017年３月16日㈭】

教如上人研究班としては最後の調査として、広島県福山市の妙蓮寺に赴いて調査を実施した。妙蓮寺は、徳川家康の側近であった水野勝成が、母である妙舜尼の菩提を弔うために建立した寺院である。妙舜尼については二種類の伝承があり、一つが、都筑右京進という武士の娘であったという説と、今一つが本願寺第11代顕如上人の妹であったとする説である。今回の調査で、由緒書類などを実見する中で、この二つの伝承が並存していることが確認できた。本願寺との血縁関係についてはまだ有力な手がかりを得られていないが、いずれにしても、妙舜尼の夫である水野忠重の兄妹には、徳川家康正室の於大や、三河武士の真宗信仰の中心にいた石川一族に嫁いだ妙春尼がいることなどから考えると、本願寺ともかなり深い関係を結んでいた人物である可能性は高いと思われる。当寺は、戦災によって多くの史料が焼失したとされているが、目録などによれば、教如上人の消息や寿像などもかつては所蔵されていたという。今回は、教如上人の子息で、東本願寺第13代宣如上人が妙舜尼に宛てた消息や、宣如上人裏書の妙舜尼似影（絵像）などを確認することができ､本願寺・水野家・徳川家などのつながりの結び目に妙舜尼のような女性のいたことが明らかになり、今後の研究進展への大きな手がかりを得ることができた。

宣如上人が裏書した
妙舜尼似影

〔付記〕いずれの調査も、各寺院・ご門徒の皆さまのご理解と全面的な協力のもと行うことができたものである。厚く御礼を申し上げます。

『清沢満之全集』別巻刊行に向けて 清沢満之自筆文献調査報告

2016年度指定研究　清沢満之研究　研究員・講師　西本 祐攝

大谷大学は、2002年11月から2003年７月にかけて『清沢満之全集』（全９巻、岩波書店、以下『全集』と略）を刊行した。掲載文献は清沢自身の著述に絞ることを原則としている。現在、本研究では『全集』別巻の刊行にむけて研究活動を進めているが、この原則を踏襲することを現在の研究員間でも確認済である。掲載基準を満たす文献の収集を目的とし、本年度は二度の出張調査を行った。その概要を報告する。

2016年11月11日㈮に、西本祐攝（研究員）、荒金拓（研究補助員）、井上泰之（研究補助員）、百武涼子（研究補助者）が、清沢満之自坊の真宗大谷派西方寺（愛知県碧南市）への調査を実施した。同寺所蔵の清沢自筆書簡（『全集』未収録）と大谷光演筆の清沢宛書簡等の調査と撮影を行った。清沢自筆書簡は、原肱千宛、清沢やす宛２通、清沢厳照・法賢宛である。清沢宛書簡は、清沢やす書簡（草案）、大谷光演書簡３通である。これらには清沢の行実で不明な時期の記述がなされており、明治32年に大谷光演の招きで清沢が東上する時期のものと推定される書簡も確認された。清沢満之研究のみならず、真宗大谷派宗門と清沢、大学史研究においても重要な文献群であることを確認した。

2017年２月20日㈪に藤原正寿（研究員）、西本祐攝（研究員）、荒金拓（研究補助員）が、真宗大学（京都）学監であった占部観順の自坊唯法寺（愛知県西尾市順海町）への調査を実施した。唯法寺には2006年11月９日に、『臘扇記注釈』（真宗総合研究所編、法藏館、2008年）刊行に向けた調査（西本祐攝と日野圭悟が調査）を行った際にも御協力をいただき、占部観順、占部公順、占部傑等の行実等を詳しく教えていただき、また清沢自筆書簡の所蔵情報をご提供いただいた。これはすでに畑辺初代氏が『真宗総合研究所研究所報』（第22号・20頁、1989年）に報告しているように、氏がかつて唯法寺所蔵文献を調査した際に発見した文献である。

しかし、唯法寺では現在、清沢自筆書簡を特定していない状況であった。現住職の話によると、岡崎別院での占部観順展に関連文献を出展した後、同寺所蔵の文献群のどこにあるか不明となったそうである。そこでまずは同寺所蔵の文献を一つひとつ確認し、清沢関連の文献を確認する作業を行った。今回の調査では明確に清沢の自筆書簡と確認できるものはなかった。他に占部観順筆の清沢宛書簡（未開封、未郵送）１通を発見したため、同寺住職の立ち会いのもと開封し、内容確認と撮影を行った。清沢自筆文献ではないため『全集』別巻掲載基準は満たさないが、重要な文献であることを研究員間で確認した。同寺には占部観順の真宗大学関係資料が豊富に所蔵されており、これらは大学史研究においても貴重な文献であると考えられる。

近年、進展を見せる清沢満之研究において、本学編『全集』は多数引用されており、『全集』刊行は研究推進に大きく寄与していると言えよう。清沢満之研究は1991年に発足し、1993年に当時の研究代表者であった安冨信哉教授によって『全集』刊行への本格的な提言がなされて以降、2002年４月の響流館開館に先んじて同年２月に響流館内真宗総合研究所に実務の場を移すまでの10年間を含め、地道な文献収集と翻刻、および掲載基準に関する検討を重ねてきた。刊行は編集委員11名、編集実務担当教員27名、刊行当時の研究補助員４名のみではなく、1991年からの研究活動に携わってきた研究補助員と研究補助者（数十名）の尽力により実現したものである。

本研究では『全集』別巻刊行に向けて文献収集と掲載基準を満たすか否かの検討を継続的に行っている。今回の出張成果を踏まえ、文献収集と厳密な検討を行うことが、『全集』別巻の刊行に不可欠な研究実務であることを改めて確認した。

〔付記〕西方寺様と唯法寺様には調査研究にご理解と全面的なご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

唯法寺での調査風景

公開講演会・公開研究会

公開研究会
「日本における仏伝文学の変容―ベトナム仏教における「釈迦雪山苦行」信仰を考えるために―」

ベトナム仏教研究　研究代表者・教授　織田 顕祐

2017年２月23日㈭16時30分より、箕浦尚美先生（同朋大学専任講師）をお招きして「日本における仏伝文学の変容―ベトナム仏教における「釈迦雪山苦行」信仰を考えるために―」と題する公開研究会を、慶聞館５階のＫ501教室において開催した。箕浦先生は、日本文学分野のいわゆる「本地物」と呼ばれる分野の文学作品を中心に研究を進められている研究者である。そうした分野の専門家を招聘して公開研究会を実施したのは次のような背景による。

本研究班では、ここ数年にわたって現在日本ではほとんど知られていないベトナム仏教の実態を知るために、ベトナム北部地域の現地調査を実施してきた。その結果、これまであまりよく知られていなかったベトナム仏教の特徴が少し見えてきた。いくつかを例示すれば、次の通りである。

①ベトナムの仏教が我が国よりも古い歴史を持っていると考えられること
②日本の仏教とは全く異なり道教などのいくつもの他宗教の要素が習合していること
③基本的に漢字文化圏なのであるが漢字使用をやめてしまったために表音文字で漢字の意味を理解するという難しい現状にあること
④大乗仏教と上座部系の阿含仏教とが混淆しておりそれが周辺地域に対するベトナム仏教の優位性であると考えていること

などである。その他にも、特異な本堂内陣の荘厳や伽藍配置など、数え上げればきりがない。

日本とベトナムは同じように漢字文化圏にありながら、一体どのような理由によってこのような現状に至ったのか。こうした点を考えることは、ベトナム仏教を理解するのみならず、日本仏教の特質を考えるためのヒントになると思われるのである。

前回の訪越で特に強い印象を与えた一連の仏像がある。それは、「釈迦苦行像」と題された仏像である。ベトナム北部の有力寺院には、本尊の釈迦如来とは別に、「雪山苦行像」と命名された釈迦仏像が安置されている。日本には全く存在しないタイプの仏像であり、本堂須弥壇の釈迦如来とは全く様子の異なる仏像である。ブッダ釈尊の伝記を記した経典は、修行の場所を例外なく「苦行林」としており、釈尊が雪山で苦行したとはどこにも説かれていない。しかし、ジャータカ（本生譚）には主人公が雪山で功徳を積む物語はいくつもある。おそらく、歴史の中で両者が重なってしまったのであろう。日本にはこうした仏像は存在しないが、文学作品や禅宗系の仏伝文学の中に同じ趣旨の所説を散見することができる。この問題は、日本仏教の「釈尊観」の変化とも関係すると思われる極めて重要な問題なのである。そこで、こうした視点によって、日本の文学作品の簡潔な整理・紹介と、それらに対する研究の現状を、箕浦先生に発題していただき、自由に質疑応答しようと考えたのである。

箕浦先生は、我々の要請を請けて次の２点を発題された。

①古代中世の日本における釈尊伝の変容　前生譚との関わりを視点として
②本地物（日本の説話等における神仏の前生譚）における菩薩行（捨身・誓願の比重）

①では、古代中世における日本文学の釈尊伝は前生

箕浦尚美先生による発表

譚との関わりを通して捉えられると実例を挙げながら提示された。特に平安中期の『三宝絵』までは前生譚によってブッダを理解しているが、平安後期になると「釈迦八相」という釈尊観に転換していき、前生譚はその内部に取り込まれていったと指摘された。その際、平安末期の『梁塵秘抄』などでは、前生譚である「スダナ太子の檀徳山修行」を取り込んでいるが、その後臨済禅の普及と共に大乗『涅槃経』による「雪山修行物語」が広まったのではないかと指摘された。これは実に興味深い指摘であり、今後は「八相成道」という釈尊観の成立と日本への将来・普及を明らかにしなければならないことが明確になった。またこの点は現在のベトナム仏教が臨済禅を自称していることとも関係があると思われる。

②では、「本地物」と呼ばれる文学作品の概要が示された。「本地物」とは、様々な苦悩を体験した主人公が、人間のその苦悩を救済する為に神仏の加護を得て、神仏に転生するという文脈を持つ日本文学である。その中では、一応前生譚を説いてはいるが、それは誓願による菩薩道とは異質のもので、仏教思想を借りた物語文学であるとのことである。

研究班の外からも、文学や歴史学の専門家が集まり、活発な議論が交わされた。我々の全く知らない内容も多く含まれ、学際的な研究と交流の必要性を強く感じた研究会となった。

中国社会科学院歴史研究所との公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授　井黒 忍

2016年11月16日㈬に中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、同研究所より２名の研究者を招聘し、響流館４階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて研究発表および参加者一同による討論を行った。

発表者と発表テーマは、趙凱（中国社会科学院歴史研究所社会史研究室副主任、副研究員）「“茲に霊木に杖つき、以て眉寿を介く”―出土物からみた秦漢時代の用杖習俗」、康鵬（中国社会科学院歴史研究所宋遼金元史研究室助理研究員）「Sharaf al-Zamān Tāhir Marvaziの書中における契丹の“都城”―遼代の中西交通ルートの検討を兼ねて」である。

以下、各発表の概要を示す。まず、趙凱氏の発表においては、漢代の手杖に関する検討がなされる。漢代の手杖は機能の面から見て儀礼的なものと実用的なものの２種類に分けられる。儀礼的な手杖としては皇帝からの賜杖があり、以下の３種類がこれに含まれる。１つ目は毎年70歳以上の高齢者に与えられた賜杖であり、木製で持ち手が鳩首の形をしていることから王杖、もしくは鳩杖と呼ばれる。２つ目は諸侯王らへの賜杖であり、握りは青銅製の鳥型のものが多く、金銀を用いたものもあり、老人がもたれかかる杖と権力を表す杖としての両方の意味を持つものであった。３つ目は特殊な身分を有する高齢者に与えられた霊寿杖という種類の杖である。

１つ目の杖が恒常的な制度のもとで与えられるものであり、賜与の範囲が広いのに対して、２つ目と３つ目の賜杖は臨時的な行為であり、賜与の範囲は小さかった。儀礼的な手杖は漢代の手杖の中心的な存在ではなかったが、その政治的意味合いが明確であったために、歴史家や後世の研究者たちから重視されてきた。

実用的な手杖としては漢代の手杖が中心となり、画像石には多くの手杖の姿が描かれる。現在までに発見された実用的な手杖は多くが前漢期に集中し、手杖の所有者の遺骨を病理検査したところ、墓主は高齢であるか、あるいは日常の行動に支障をきたすような疾病を有していたことが分かった。例えば馬王堆１号墓から出土した手杖からは、墓主の辛追は年齢がおよそ50歳で、病気を患っており、第４腰椎と第５腰椎の間が狭まっていて、椎体に相対する箇所の骨質が多いことから、生前の生活では手杖が手放せなかったことが分かる。出土遺物から見ると、実用的な手杖の長さは150センチを超えず、儀礼的な「王杖」との差はおよそ50センチであり、この長さの違いが両者の機能の差を表している。

続いて、康鵬氏の発表においては、11世紀の中央アジアメルブの人、シャラーフ＝アルザマーン＝タヒール＝マルワージーが記録した遼の東西交通路に関する

検討がなされる。マルワージーの書には、今の甘粛省敦煌市に当たる沙州から東に向かって２ヶ月進むと可敦墓Khātūn-sanに至り、再び１ヶ月進むとŪtkinに至り、再び１ヶ月で契丹の都城であるŪjamに至ると記される。一般的にŪtkinは今のモンゴル国のハンガイ（杭愛）山に当たるウテュケン（郁督軍：Ötükän）山か、もしくは今の河北省張家口市涿鹿県に当たる遼の武定軍（奉聖州）に相当し、契丹の都城であるŪjamは今の内モンゴル自治区赤峰市巴林左旗に当たる遼の上京に相当するとみなされることが多い。

これに対して、発表者はŪtkinは遼の上京であり、これが契丹語で上京を意味する*Utkiŋに由来する語であると考える。移動コースから見ても、可敦墓から上京まではちょうど１ヶ月の道のりにあたる。また、Ūjamの語に関しても、これが遼皇帝の行宮を述べたものであり、「御帳」の語の対音である可能性が高く、マルワージーのŪjamに関する叙述とも完全に符合する。遼の政治の中心が捺鉢（オルド：斡魯朶）の内にあったということが、中央アジアの人に遼皇帝の御帳がすなわち都城であるいう誤った認識を与えることになったと考える。

清沢満之研究公開研究会
星野靖二氏講演
「「新仏教」のゆくえ―中西牛郎・『経世博議』・清沢満之」

2016年度指定研究　清沢満之研究　研究員・講師　西本 祐攝

清沢満之研究では、現在、大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店）の別巻刊行に向けて研究を進めているが、それに関連する公開研究会を2017年２月23日㈭、真宗総合研究所内ミーティングルームにおいて開催した。講師には國學院大學准教授の星野靖二氏をお招きし、「「新仏教」のゆくえ―中西牛郎・『経世博議』・清沢満之」と題する１時間半の講演をいただき、質疑を行った。講師の星野氏は、2002年から 2007年まで日本学術振興会の特別研究員を、さらに2011年から2013年まではハーバード大学ライシャワー日本研究所の客員研究員を勤め、現在は國學院大學の研究開発推進機構に勤務されている。

星野氏の研究分野は、近代日本における宗教概念と宗教言説である。この分野には国際日本文化研究センター教授の磯前順一氏にすぐれた研究があるが、星野氏は磯前氏の研究成果を受け継ぎつつ、宗教概念の形成過程を歴史的にあとづけるという新たな視点から、近代日本における宗教概念と宗教言説の形成・変遷についての研究を続けている。その成果は、博士論文に加筆し書籍化された氏の著書『近代日本の宗教概念――宗教者の言葉と近代』（有志舎、2012年）にまとめられている。

近年は特に、中西牛郎についての研究を進め、2016年６月には、中西が主筆を務めた『経世博議』に清沢の論稿４篇（うち３篇は大谷大学編『清沢満之全集』に未収録）が掲載されていることを発表されている。中西は、清沢満之が活躍する以前の明治仏教界を牽引した人物であり、また近代日本を代表する雑誌『新仏教』にも関わっている。また、一時期、渥美契縁の要請により真宗大谷派が刊行する『常葉』の主筆もつとめており、清沢等による宗門改革運動を批判した人物としても知られている。しかしながら、これまで清沢と中西の直接的な関係については不明な点も多く、清沢の日記・書簡や周囲の人物による追憶等に中西の名前や『経世博議』の書名は見えるものの、清沢が『経世博議』に論稿を寄せたという明確な記述はなく、知られていなかった。『全集』別巻刊行に向けては、『経世博議』に掲載された文献についてはもちろんのこと、解題・解説の作成に向けても、中西と『経世博議』について確かめることが不可欠であり、星野氏をお招きしての研究会を開催した。

講演内容は、「１、はじめに」「２、中西牛郎とは誰か――略歴」「３、中西牛郎の「新仏教」――1890年代の仏教改良論」「４、おわりに：その後の展開」という構成で行われ、中西の生涯の事蹟、仏教観、『経世博議』、新仏教運動への展開、真宗大谷派宗門との関係、天理教との関係等、多岐に及んだ。その全てをこの誌面で紹介することはできないが、中西が進化論

の枠組みで宗教を捉え、過去の宗教の歴史は宗教進化の歴史であるとし、宗教進化論に基づき現状の仏教（「旧仏教」）を改良すべきことを主張していること。その具体的な方策を提言していたこと。中西著『宗教革命論』で旧仏教との対比における「新仏教」が提言されており、この内容と『新仏教』誌の関連について言及がなされた。

また、『経世博議』掲載の清沢論稿「学問ト宗教トノ関係」「転化の観念」「調和論」「精神的三要」の概要をお話いただいた。「調和論」は『全集』第二巻所収の同名文献と同内容である。『全集』では西方寺蔵の自筆原稿を依拠本として翻刻・掲載したが、執筆年次については明治28年１月頃と推定する従来の研究（法藏館『清沢満之全集』等）を踏襲している。「調和論」は1892（明治25）年２月20日発行『経世博議』14号に掲載されており、執筆年次が３年ほど遡るものであることが確認された。これらは清沢の生涯の行実のみではなく、思想研究においても再検討を要する文献であることを確認する有意義な研究会となった。

『全集』別巻刊行には収録文献の内容検討、及び解題・解説作成に向けた研究が不可欠である。星野氏には『経世博議』全号のデータベースをご提供いただいた。

東京分室主催公開研究会「柳宗悦と宗教」開催報告

東京分室PD研究員　松澤 裕樹

第１回「宗教と人間」研究会　テーマ「柳宗悦と宗教」
2017年２月11日㈯19時～（親鸞仏教センター３F仏間）
若松英輔氏（批評家）「宗教哲学者・柳宗悦」
大沢啓徳氏（早稲田大学非常勤講師）
「民藝理論における宗教性」

民藝運動の創始者として名高い柳宗悦（1889－1961）が、宗教哲学者としての顔も同時に持ち合わせていることはしばしば忘れられている。柳宗悦は、宗教哲学者として民藝にいかなる宗教性を見出し、民藝理論においていかなる宗教論を展開したのか。柳宗悦の宗教思想に深く精通する二人の講演者をお招きし、講演と対談を通じて上記の問題を明らかにしようと試みた。

若松英輔氏は「宗教哲学者・柳宗悦（1889-1961）」という題目で講演を行った。生涯宗教哲学者であった柳は、一貫して宗派の彼方にある一なる宗教を希求しており、初期の宗教哲学時代には、言葉を超えた意味そのものである「コトバ」を、言葉を通じて語り出し、後の民藝時代には、民藝を通じて言葉を介さずに「コトバ」を語り出したということが講演では語られた。

大沢啓徳氏は「民藝理論における宗教性」という題目で講演を行った。講演では、本来一である真・善・

対談する若松氏と大沢氏

研究会の様子

美の内で、特に美を目指す民藝によって社会を美しくしようとしたのが民藝運動であり、民藝理論として用の美・無名性・健康の美について詳しく語られた。

対談では、学者である我々がものを直接見ることの重要性に焦点が当てられ、普段眠っている我々の内なる民衆を再び目覚めさせることの大切さについて様々な視点から語られた。質疑応答では、柳における宗教と言葉の関係について問いが発せられ、語り得ないものを心に宿しつつ語り出すことによって、それを聞くものに超越者の片鱗を伝えることは可能であり、日本民藝館の意義も語り得ないものを、ものを媒介として伝えることにあるという応答がなされた。

東京分室主催公開研究会「台湾原住民族アミとカトリック信仰」開催報告

東京分室PD研究員　田崎 郁子

第２回「宗教と人間」研究会「台湾原住民族アミとカトリック信仰」

2017年３月29日㈬16時～（親鸞仏教センター５Fセミナー室）

岡田紅理子氏（上智大学大学院・博士課程）

台湾には、人口の2.4％を占めるオーストロネシア語族に属する16の先住民族がいる（2016年12月現在）。彼（女）らは「原住民族」と呼ばれ、台湾におけるキリスト教人口が全体の７％程であるなか（『2015台灣基督教會教勢報告』調べ）、日本植民地時代終了後その約80％がキリスト教を信仰しているといわれる。元来、多神崇拝と精霊祭祀をしていたといわれる原住民族は、いかにしてキリスト教という一神崇拝を受け入れ、その信仰を形成・維持してきたのだろうか。岡田さんは、原住民族最大の民族集団である「アミ」のカトリック信仰の語りからこれを検討し、「改宗」とはなんであるかについて報告された。

特に、岡田さんは日本植民地下の行政と宗教関連政策に着目し、植民地当局が台湾の在来宗教を温存しつつ国家神道を導入したこと、国家神道と教育との結びつき、その中でアミの人々が天照大神信仰を受け入れたこと、さらにこういった経緯によってキリスト教という一神崇拝を受け入れる素地が形成されてきたことを、具体的な史料や住民の語りの分析とともに提示した。また、２次世界大戦後のアミへのカトリック信仰の広がりを、本土化や原住民族運動、都市移住と都市での共同体形成など、それぞれの時期の台湾の社会的文脈に位置づけて考察した。そして日本植民地期から宣教期、移住期、定住期という歴史的な流れの中でアミのカトリックへの改宗と信仰を捉える視座を提示した。

質疑応答では、なにをもって改宗とするのかという点に加え、「アミ」にとって神やキリスト教、あるいは宗教が何を意味するのかについて、外部から参加された研究者を交えて活発な議論が展開された。

発表する岡田氏

研究会の様子

東京分室PD研究員個人研究紹介

パーリ語の時制に関する研究

稲葉 維摩

これまでの研究として、初期仏教研究の一次資料であるパーリ語仏典を用い、仏教用語の研究およびパーリ語文法研究を行ってきた。仏教は紀元前4世紀頃のブッダに始まるが、当然それまでの歴史の上に存在するものである。仏教が興る以前、インドでは紀元前1,200年頃に編纂された『リグヴェーダ』を初めとするヴェーダ文献に基づく祭式文化が続いており、それは後の歴史を貫く基礎ともなっている。ブッダに最も近い時代では、宇宙と個人の原理を探求するウパニシャッド文献が成立していた。社会としては、16の大国が興る時代であった。仏教はこのような歴史の上に現れるため、仏教の問題とするところや議論の背景、文化的記述、さらには個々の単語に到るまで、その理解のためには歴史的な視点が必要不可欠である。このような認識のもと、正確な説明がされていなかった仏教用語や単語を取り上げ、その意味内容を研究してきた。

また同時にパーリ語の文法研究も進めてきた。パーリ語はインド西部の方言で中期インド・アーリヤ語という分類に属し、ヴェーダ文献の言語であるヴェーダ語やサンスクリット語（これらは古期インド・アーリヤ語に分類される）とともにインド・イラン語派、インド・アーリヤ語に属する。ヴェーダ語に比べ、パーリ語は音韻や文法の点で単純化が起こっている一方、ヴェーダ語よりも古い特徴を持つなど、異なる性格を備える。単語の意味や用法にも違いが認められる。これまでの研究史において、ヴェーダ語やサンスクリット語との比較を通して、語の形や意味内容、名詞の曲用、動詞の活用の問題が研究されてきた。しかしながら、未解決の問題が多いため、パーリ語仏典を一次資料として仏教研究を進める場合、このような音韻や文法の問題を避けて通ることはできない。筆者も個々の問題ある動詞の語形や意味について、ヴェーダ語やサンスクリット語に基づき、パーリ語での展開を示す形で研究を進めてきた。

しかしながら、これまでのパーリ語研究に関して、個々の文法事項がどのような役割を担い、体系を作っているかという基本的な研究があまり注目されてこなかったことが問題点としてあげられる。パーリ語の文法はヴェーダ語やサンスクリット語のそれと異なるため、その理解には実際の用法がパーリ語文法の体系の中でどのように位置づけられているかという観点が必須である。

したがって今後の研究では、パーリ語文法の体系という点に着目していくことを計画している。具体的にはパーリ語の時制に関する研究を計画している。例えば、ヴェーダ語やサンスクリット語の過去時制が「未完了過去」「アオリスト」「完了」と三つあり、個々に役割を持っていたのに対し、パーリ語の過去時制は「アオリスト」に一本化している。このことから、過去の事柄の表現方法がヴェーダ語やサンスクリット語と大きく異なることがわかる。そしてパーリ語はどのような時制体系を持ち、どのように用いられていたのかが問題となる。このような問題に対し、筆者は成立年代が大幅に異なるパーリ語仏典の内、初期に成立した文献群を研究対象として、時制の用法を調べる。具体的には『ディーガニカーヤ』、『マッジマニカーヤ』、『サンユッタニカーヤ』、『アングッタラニカーヤ』を中心資料とする。これらは仏教の教えを説き示す豊富なエピソードを収めた、初期仏教の標準的な文献である。文法の問題に留まらず、思想史や当時の社会・文化を伝える貴重な資料であるため、本研究もこれらのテクストを用いる。このことによって、パーリ語のより具体的な姿を明らかにし、初期仏教研究の一次資料であるパーリ語仏典が何をどのように語っているのかという、仏教理解のための出発点を示すことを目指す。

Pali Text Society が出版している
パーリ語校訂本の一例

安冨信哉先生追悼

安冨信哉先生（1944 年～ 2017 年）を偲んで

国際仏教研究　研究員・講師　Michael J. Conway

真宗総合研究所の活動に発足当時から長年にわたりご尽力くださった安冨信哉先生（本学名誉教授）が、2017年３月31日の早朝にご逝去された。先生が本研究所で手掛けられたプロジェクトは多大な成果を上げ、現在の国際仏教研究班の基盤を築いたという点でも大きく貢献している。安冨先生は多くの優れた研究書や論文を著し、現代の真宗学に特筆すべき功績を遺されたが、ここでは真宗総合研究所における活動に限って紹介し、追悼の意を表したい。

安冨先生は、早稲田大学の英文学科を卒業後、1967年に大谷大学の大学院に入学された。若い時に英文学を学んだことが生涯を通して先生の研究の視点に影響を与え、先生は常に親鸞の思想と真宗の教えが持つ意義を世界的な視野において捉えようとされた。1980年には大谷大学の専任講師に就任され、1982年、真宗総合研究所に「海外仏教研究」班が設けられると、先生はその初代研究員となられた。その時から2009年に教授職を退任するまで、絶えず研究所の研究員を勤め、特任教授になってからも、嘱託研究員として活動に関わり続けて下さった。その40年に及ぶ研究員歴の中で30年間、海外仏教研究と国際仏教研究の研究員として研究活動を推進された。

1982年に発足した海外仏教研究は、仏教が海外においていかに研究されているかという問題を軸に９年間活動を展開した。欧米で仏教学研究に取り入れられていた方法論について調査し検討することによって、日本における仏教学･真宗学の研究を刷新しようとして、欧文仏教学研究書と論文の目録作り及び収集・精読、さらに欧米で活躍されていた著名な研究者を招聘し、講演会や研究懇談会を開催した。安冨先生は、その初年度から学内の研究会で発表を行い、海外からの研究者の招聘にも積極的に関わっていた。1985年には、ウィスコンシン州立大学マディソン校において半年間のジョイントセミナーに参加され、その経験を海外仏教研究の活動に活かすべく努力された。1991年度から「海外仏教研究」は「国際仏教研究」に改められ、それまで続けられた「受信」の研究活動から、仏教の思想及び本学の研究成果を国際的に「発信」する活動も加わった。研究員は、国際真宗学会をはじめ多くの国際学会で発表し、「対話」ということが重要な研究課題となった。

国際仏教研究の活動と同時に、安冨先生は、1993年度と1994年度には「近代における仏教の展開―清沢満之の思想形成の研究と基礎資料の修正―」と題する共同研究の代表者を務められた。その成果発表において、先生はそれまで発刊された清沢満之の全集が絶版となり入手困難となっていることを受けて、「全集作成を視野に入れながら、基礎資料の収集に努めるとともに、テキストの検討および対校の作業を行ってきた」（『真宗総合研究所研究紀要』第13号、94頁）と述べている。2002年から2003年の間に岩波書店版『清沢満之全集』（９巻）として結実した研究は、このプロジェクトから始まったものである。

1996年度から1999年度まで、安冨先生は国際仏教研究のチーフを務められたが、この４年の間に、国際仏教研究の画期的な３つのプロジェクトが、先生の指揮のもと立ち上げられた。先ず①大谷派の近代教学の代表的な思想家とその論考を英文で紹介するアンソロジーの計画が練られ、その下訳もほとんど完成された。これらの翻訳は、2011年に『*Cultivating Spirituality*：*A Modern Shin Buddhist Anthology*』（ロバート・ローズ研究員、マーク・ブラム嘱託研究員共編）としてニューヨーク州立大学出版から刊行された。次に②大谷大学を会場とした1998年の日本印度学仏教学会の特別部会で行われた発表をベースに、蓮如についての英文研究書の作成が始まった。このプロジェクトも、2006年に『*Rennyo and the Roots of Modern Japanese Buddhism*』（安冨先生とブラム嘱託研究員の共編）としてオックスフォード大学出版より出された。そして③プロテスタントの福音派神学研究を代表するドイツのフィリップス・マーブルグ大学と本学の共同研究プロジェクトも始まり、真宗の研究者とキリスト教の神学者の対話が行われるようになった。この宗教間対話研究の成果も、やがてドイツ語と日本語の学術書（計６冊）として発表されることになった。

2000年度に、安冨先生は大学院文学研究科長となり、国際仏教研究のチーフを退いたものの、研究員として活躍し続け、かつ研究所の委員の一人として、研究所

全体の運営にも関わられた。研究科長の任期が終わった2002年度と2003年度には、真宗学事研究のキャップとして、『大谷大学百年史』の出版に向けて収集された資料の整理と保管作業の指揮に加え、『百年史』の資料編として発刊された『戦時体験集―学徒出陣・勤労動員の記録―』の作成に携わり、さらに2004年度には大学史研究のチーフを務められた。

2005年７月から大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究として「親鸞像の再構築」という研究課題のもと、新たな研究班が立ち上がったが、安冨先生は最初の２年間そのチーフを務め、全体の構想から各研究会の企画を主導された。その成果は2011年に筑摩書房より、『『教行信証』の思想』と『親鸞像の再構築』という２巻からなる親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集（大谷大学真宗総合研究所編）として出版された。

こうしてまとめてみると、過去20年間に出された真宗総合研究所の大きな研究成果の多くに、先生は企画段階から深く関わっておられ、先生のビジョンがそれらの研究の核を形作っていたことに気付かされる。

最後に私が先生と言葉を交わしたのは、３月30日に研究所の事務室から電話した折で、翌日の朝に研究所ミーティングルームで予定されていた東方仏教徒協会（EBS）の編集者公募選考会に出席いただくお願いをした。安冨先生の念願によってEBSの業務が真宗総合研究所に無事に引き継がれる目処がついたことを、先生の声は喜んでいたが、会議に来られる前に、突然その命が尽きてしまわれた。73歳というのはあまりに早過ぎるが、最後の最後まで、真宗総合研究所を通して、親鸞が明かした浄土真宗の思想を明確にし、国際的に発信しようとされた一生であった。

真宗総合研究所彙報　2016. 11. 1 ～ 2017. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2016年12月５日㈪ 13:00～14:00（博綜館第５会議室）

（紀要編集委員会）

１．紀要投稿論文査読結果について

２．その他

（研究所委員会）

１．客員研究員の委嘱について

２．その他

◇2017年１月16日㈪ 13:00～14:00（博綜館第４会議室）

１．カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所との協定締結について

２．2017年度「一般研究」の採択について

３．特別研究員の人事について

４．研究組織の変更について

・西蔵文献研究班嘱託研究員の追加

５．モンゴル国立大学との共同研究の論文集の発行について

６．報告事項

・真宗総合研究所東京分室PD研究員の採用について

７．その他

◇2017年２月９日㈭ 9:30～10:00（博綜館第５会議室）

１．東京分室PD研究員の採用について

２．その他

◇2017年２月20日㈪ 16:30～17:00（博綜館第４会議室）

１．東方仏教徒協会規程について

２．その他

○2016年度「指定研究」「資料室」研究成果報告会

2017年３月８日㈬ 17:00～18:45（慶聞館４階K407教室）

○2016年度第２回研究員総会

2017年３月８日㈬ 18:45～19:00（慶聞館４階K407教室）

１．真宗総合研究所長からの報告

２．研究活動におけるコンプライアンスについて

懇親会　19:00～（慶聞館４階南マルチスペース）

教如上人研究

【調査】

◇2016年９月10日㈯

場　所：東光寺（京都市下京区）

内　容：『本願寺御由緒略記』ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影

東光寺は、教如上人側近として特に宗学の側面で重要な役割を果たした、了海を開基とする寺院である。今回は、東本願寺歴代の御影や由緒書、など17点を調査した。

参加者：老泉量、川端泰幸、草野顕之、東舘紹見、百武涼子、平野寿則

◇2017年３月14日㈫

場　所：徳正寺（京都市下京区）

内　容：教如上人消息ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影

徳正寺は、本願寺第８代蓮如上人に帰依した井上願知を開基とする寺院であり、願知は、比叡山衆徒による東山の大谷本願寺破却事件などに際して、その地を守り続けた人物としてよく知られている。今回は、35点の史料を調査したが、予想以上に重要な史料が多く遺されていることがわかるとともに、教如上人のみならず、織田・豊臣・徳川との深い関係を有する一族が入寺している寺院であることが見えてきた。

参加者：老泉量、大桑斉、川端泰幸、東舘紹見、百武涼子、平野寿則

◇2017年３月16日㈭

場　所：妙蓮寺（広島県福山市）

内　容：妙舜尼似影ほか、寺蔵資料の調書作成・撮影

妙連寺は徳川譜代の水野勝成が、母妙舜尼の菩提を弔うために建立した寺院で、今回は由緒書類や、妙舜尼の似影、水野勝成の絵像など、22点を調査した。これらの史料は、徳川幕府や武士団と浄土真宗とのつながりを考えるうえで非常に重要な手がかりとなるもので、妙舜尼や水野氏が、東本願寺の創立ということに与えた影響などを考えるにあたっても、大切な史料であることが見えてきた。

参加者：老泉量、川端泰幸、草野顕之、東舘紹見、百武涼子、平野寿則

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第６回ミーティング
日　時：2016年10月27日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　西本祐攝　荒金拓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：翻刻校正の進捗状況について
西方寺出張の打ち合わせ
法讃寺所蔵清沢満之自筆書簡について
森岡清美著『真宗大谷派の革新運動――白川党・井上豊忠のライフヒストリー』について
その他

◇第７回ミーティング
日　時：2016年11月３日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　西本祐攝　荒金拓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：翻刻校正の進捗状況について
西方寺出張の準備
祐誓寺蔵『住田智見筆録清沢満之講義ノート』について

◇第８回ミーティング
日　時：2016年11月10日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　西本祐攝　井上泰之　荒金拓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：翻刻校正の進捗状況について
西方寺出張の確認
祐誓寺蔵『住田智見筆録清沢満之講義ノート』について
公開研究会について

◇第９回ミーティング
日　時：2016年11月24日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　西本祐攝　荒金拓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：翻刻校正の進捗状況について
西方寺出張の報告
公開研究会（星野先生への依頼）について
森岡清美先生への研究協力依頼について
真宗史研究会（同朋大学）について
雑誌『徳風』について

◇第10回ミーティング
日　時：2016年12月８日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　西本祐攝　井上泰之　荒金拓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：翻刻校正の進捗状況について
公開研究会について
唯法寺への調査協力依頼について

◇第11回ミーティング
日　時：2016年12月15日㈭ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　一楽真　加来雄之　村山保史
西本祐攝　名畑直日児　井上泰之　荒金拓
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：翻刻済文献の内容精査報告
公開研究会について

◇第12回ミーティング
日　時：2017年２月１日㈬ 13:00 ～ 14:30
出席者：藤原正寿　一楽真　加来雄之　村山保史
西本祐攝　名畑直日児　荒金拓
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：研究班の今後について
公開研究会について
唯法寺への出張調査について

◇第13回ミーティング
日　時：2017年３月２日㈭ 14:00 ～ 15:30
出席者：藤原正寿　一楽真　加来雄之　村山保史
西本祐攝　名畑直日児　荒金拓
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：研究班の今後について
出張調査について
研究活動報告会の準備

【公開研究会】
日　時：2017年２月23日㈭ 15：00～17：00
会　場：真宗総合研究所内ミーティングルーム
発表者：星野靖二氏（國學院大學准教授）
講　題：「「新仏教」のゆくえ―中西牛郎・『経世博議』・清沢満之」

【出張調査】
日　程：2016年11月11日㈮
場　所：西方寺（愛知県碧南市）
目　的：清沢自筆書簡の調査
出張者：西本祐攝（研究員）、荒金拓（研究補助員）、

井上泰之（研究補助員）、百武涼子（研究補助者）

日　程：2016年12月22日㈭
場　所：同朋大学（愛知県名古屋市）
目　的：真宗史研究会への参加
出張者：藤原正寿（研究代表者）、西本祐攝（研究員）

日　程：2017年２月20日㈪
場　所：唯法寺（愛知県西尾市）
目　的：清沢自筆書簡の調査
出張者：藤原正寿（研究代表者）、西本祐攝（研究員）、荒金拓（研究補助員）

日　程：2017年３月12日㈰～13日㈪
場　所：東洋大学（白山キャンパス）、求道会館
出張者：藤原正寿（研究代表者）、村山保史（研究員）、西本祐攝（研究員）
12日：『真宗大谷派の革新運動』の書評会、森岡清美氏への協力依頼
13日：第３回「清沢満之研究交流会」

国際仏教研究

＜英米班＞

【海外出張】

◇2017年３月１日㈬～４日㈯ アメリカ哲学会研究発表（アメリカ合衆国ミズーリ州カンザスシティ）
出張者：田中潤一（教育・心理学科准教授、特別招聘者）、マイケル・コンウェイ研究員

◇３月25日㈯～27日㈪ 歎異抄ワークショップ（アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー浄土真宗センター）
出張者：マイケル･コンウェイ研究員、和田良世（真宗学専攻修士課程第二学年）、鶴留正智（真宗学専攻修士課程第二学年）

＜東アジア班＞

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、同研究所より２名の研究者を招聘し、真宗総合研究所において公開研究会を行った。また、本学より２名の研究者が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表および討論を行った。

2016年11月16日㈬に響流館４階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて公開研究会を実施した。発表者と発表テーマは、趙凱（中国社会科学院歴史研究所社会史研究室副主任、副研究員）「“茲に霊木に杖つき、以て眉寿を介く”―出土物からみた秦漢時代の用杖習俗」、康鵬（中国社会科学院歴史研究所宋遼金元史研究室助理研究員）「Sharaf al-Zamān Tāhir Marvaziの書中における契丹の“都城”―遼代の中西交通ルートの検討を兼ねて」である。

2017年３月７日㈫に中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表および討論を行った。発表者と発表テーマは、井黒忍（大谷大学准教授）「近世・近代華北の水利権売買に関する一考察：山西・陝西・河南の事例に基づいて」、濱野亮介（大谷大学任期制助教）「明代民間宗教儀礼における「瑜伽（教）宗」」である。

西蔵文献研究

【海外出張】

◇３月24日㈮～ 27日㈪
場　所：中国・北京
目　的：中国蔵学研究中心訪問
出張者：三宅伸一郎・上野牧生（ともに研究員）・松川節（24日のみ）

【国内出張】

◇３月22日㈬～ 23日㈭
場　所：東洋文庫（東京）
目　的：東洋文庫所蔵パーリ語貝葉写本調査
出張者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

【調査】

◇12月15日㈭～ 16日㈮
場　所：大谷大学博物館
目　的：パーリ語貝葉文献と附属資料（包み布および挟み板）の調査
従事者：三宅伸一郎、上野牧生、武田和哉（嘱託研究員）、清水洋平（嘱託研究員）、舟橋智哉（嘱託研究員）、佐藤留実（五島美術館）、原田あゆみ（九州国立博物館）

【研究員打ち合わせ】

場　所：真宗総合研究所ミーティングルームほか
内　容：研究班の運営・企画・諸問題に関する調整
開催日：12月22日㈭、１月12日㈭、１月26日㈭、２月９日㈭、２月23日㈭、３月16日㈭

【実務作業担当者ミーティング】

場　所：真宗総合研究所西蔵文献研究班ブースほか
内　容：研究班の実務および作業実施に関する調整等
開催日：１月20日㈮

ベトナム仏教研究

【打合せ】

『日本仏教概説』執筆者の内、原稿未提出者に継続的に督促した。その結果、ほとんどの原稿を整えることができた。

◇１月30日㈪ 17時～19時30分（織田研究代表者個人研究室）
今回滞在中の研究会の予定の相談
その間における諸研究活動の打ち合わせ等

◇２月８日㈬15時～18時30分（響流館４階会議室）
今回購入の雑誌、昨夏購入の雑誌、中国広州の海幢寺関係資料のなどの内容点検
現在保管中の他資料の確認
ベトナム中部地域と研究交流の可能性の検討
ベトナム側の「ベトナム仏教概説」の翻訳に向けての相談

◇２月13日㈪ 15時～19時（真総研ミーティングルーム）
「ベトナム仏教概説提綱」（トゥアン院長執筆、大西訳）の検討

◇２月15日㈬ 15時～19時（真総研ミーティングルーム）
「ベトナム仏教概説提綱」（トゥアン院長執筆、大西訳）の検討

◇２月22日㈬ 17時～20時（真総研ミーティングルーム）
「ベトナム仏教概説提綱」（トゥアン院長執筆、大西訳）の検討
「ベトナム仏教概説提綱」翻訳の今後の進め方について

【公開研究会】

◇２月23日㈭ 16時30分～（慶聞館５階K501教室）
箕浦尚美先生（同朋大学専任講師）
「日本における仏伝文学の変容　―ベトナム仏教における「釈迦雪山苦行」信仰を考えるために―」
研究班外からも多くの参加を得た。

大谷大学史資料室

【研究会参加】

◇全国大学史資料協議会西日本部会　2016年度第４回研究会
日　程：2016年12月13日㈫
場　所：三重県総合博物館
参加者：松岡智美

【ミーティング】

◇2017年３月28日㈫ 14：00～15：00
出席者：松浦典弘・松岡智美・老泉量
場　所：真宗総合研究所
内　容：2016年度の成果報告と業務の引継ぎ

【大谷大学史資料室スポット展示関係の作業】

◇2017年３月31日㈮ 14:00～15:00
「年表で見る大谷大学のあゆみ」の展示準備
参加者：松岡智美・老泉量
場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

◇「年表で見る大谷大学のあゆみ」
期　間：2017年３月31日㈮～
参加者：松岡智美・老泉量
内　容：年表を中心に大谷大学の歴史を紹介

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

SAT（大正新脩大蔵経テキストデータベース現代語訳研究）

大正新脩大藏經テキストデータベース（SAT）のために、仏教伝道協会（BDK）英訳大蔵経 English Tripitaka所収の英訳『歎異抄』（坂東性純・Harold Stewartk共訳）を現代日本語訳する作業を行った。参加者は井上尚実（短期大学部仏教科教授）、東真行（真宗学専攻博士課程（当時））、和田良世（真宗学専攻修士課程）の３名。会場はいずれも２号館井上尚実研究室。

11月８日㈫ 16:20－18:00　11月22日㈫ 16:20－18:00
12月６日㈫ 16:20－18:00　12月13日㈫ 16:20－18:00
２月15日㈬ 15:00－18:00　２月17日㈮ 14:00－18:00

■東京分室

東京分室指定研究

【出張】

◇2016年12月４日㈰
出張先：新宿三丁目Ｔ＆Ｔビル５階貸会議室
用　務：「読むと書く一日講座　リルケの言葉を読む」参加
出張者：藤原智

◇2017年２月13日㈪
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：「次世代研究者セミナー」への参加・研究発表
出張者：田崎郁子

◇2017年２月15日㈬～28日㈫
出張先：タイ・チェンマイ
用　務：カレン村落でのフィールド調査、および仏教寺院での参与観察
出張者：松澤裕樹・田崎郁子・藤原智

【研究会】
◇2016年11月９日㈬
内　容：プロテスタンティズムとローカルな労働倫理―タイのバプテスト派カレン民族の事例から―
発表者：田崎郁子

◇2016年11月16日㈬
内　容：清沢満之の明治31年の東上と巣鴨監獄教誨事件―『宗教と倫理』をめぐる思索への展望
発表者：藤原智

◇2016年11月30日㈬
内　容：『純然たる無』―マイスター・エックハルトの異端審問文書における存在理解―
発表者：松澤裕樹

◇2016年12月14日㈬
内　容：レヴュー：Tam T.T. Ngo 2016. The New Way Protestantism and the Hmong in Vietnam. University of Washington Press.
発表者：田崎郁子

◇2016年12月21日㈬
内　容：『哲学雑誌』誌上における加藤弘之と清沢満之の論争―仏教の善悪因果応報論について―
発表者：藤原智

【公開講演会】
◇2017年２月11日㈯ 19時～（親鸞仏教センター３F仏間）
第１回「宗教と人間」研究会　テーマ「柳宗悦と宗教」
若松英輔氏（批評家）「宗教哲学者・柳宗悦」
大沢啓徳氏（早稲田大学非常勤講師）
「民藝理論における宗教性」

◇2017年３月29日㈬ 16時～（親鸞仏教センター５Fセミナー室）
第２回「宗教と人間」研究会
岡田紅理子氏（上智大学大学院・博士課程）
「台湾原住民族アミとカトリック信仰」

個人研究田崎班
【出張】
◇2016年11月26日㈯、12月８日㈭
出張先：京都大学東南アジア研究所（現東南アジア地域研究研究所）
用　務：第18、19回ゾミア研究会参加
出張者：田崎郁子

◇2017年１月13日㈮～14日㈯
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：ゾミア研究会国際ワークショップ参加
出張者：田崎郁子

◇2017年１月27日㈮
出張先：京都大学吉田キャンパス
用　務：博士論文公聴会参加
出張者：田崎郁子

◇2017年２月１日㈬
出張先：京都大学吉田キャンパス
用　務：博士論文公聴会参加
出張者：田崎郁子

◇2017年２月７日㈫
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：第23回ゾミア研究会参加
出張者：田崎郁子

◇2017年３月17日㈮
出張先：京都大学稲盛財団記念館
用　務：①清水展教授 京都大学退官記念講演
②東南アジアを研究する研究者との研究交流
出張者：田崎郁子

個人研究藤原班

【出張】

◇2016年12月22日㈭

出張先：同朋大学

用　務：第三十五回真宗史研究会参加

出張者：藤原智

◇2017年３月13日㈪

出張先：求道会館

用　務：第三回清沢満之研究交流会参加

出張者：藤原智

個人研究松澤班

【出張】

◇2017年２月５日㈰～７日㈫

出張先：韓国外国語大学ソウルキャンパス

用　務：招待講演会“Buddhism and Western thought”での講演、韓国外国語大学の研究者と交流

◇2017年２月12日㈰

出張先：徳島大学

用　務：日韓共催国際シンポジウム“On the Status and Role of Humanities in the Age of Globalization“への参加、発表

■一般研究出張関係

一般研究柴田班

◇2017年３月18日㈯

出張先：名古屋大学東山キャンパス

用　務：情報処理学会第79回全国大会での発表

出張者：柴田みゆき

◇2017年３月21日㈫～23日㈭

出張先：国立国会図書館、東京国立博物館、文京ふるさと歴史館

用　務：本邦における円形系図とその周辺資料に関する調査

出張者：生田敦司、横澤大典

一般研究鈴木班

◇2017年２月18日㈯～22日㈬

出張先：a.神奈川県立生命の星・地球博物館

b-1.白露酒造株式会社　山川工場

b-2.佐多宗二商店

b-3.薩摩酒造花渡川蒸留所（明治蔵）

b-4.本坊酒造株式会社マルツ津貫蒸留所

用　務：a.神奈川県立生命の星・地球博物館石展２シンポジウム『石展』からみえてきたもの参加（２/18）

b.鹿児島県指宿－枕崎－加世田地域焼酎蔵立地調査（２/19-22）

出張者：鈴木寿志

一般研究上田班

◇2016年12月３日㈯

出張先：東京工芸大学　中野キャンパス

用　務：電子情報通信学会ソフトウェアインタプリズモデリング研究会への参加

出張者：上田敏樹

◇2017年３月１日㈬

出張先：JA共済ビル　カンフェランスホール

用　務：ラック主催 / アカマイ・テクノロジーズ共催「2017年 頻発するウェブ攻撃の実態と対策最前線」への参加

出張者：上田敏樹

◇2017年３月16日㈭

出張先：名古屋大学　東山キャンパス

用　務：情報処理学会第79回全国大会への参加

出張者：上田敏樹

◇2017年３月22日㈬

出張先：名城大学　天白キャンパス

用　務：電子情報通信学会総合大会への参加・発表

出張者：上田敏樹

一般研究松川班

◇2016年11月23日㈬～29日㈫

開催地：大谷大学

用　務：2016年11月25日㈯ 開催のモンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究2016年度第２回研究集会への参加及び学術交流

参加者：松川節

◇2016年12月９日㈮～10日㈯

出張先：昭和女子大学国際文化研究所

用　務：ハン･ヘンテイ（大ブルカン･カルドゥン山）プロジェクト・モンゴル側研究協力者 S.チョーロン氏（モンゴル科学アカデミー歴

史・考古研究所所長）との共同研究ならびに研究打ち合わせ（10日 9:00～12:00, 18:00～21:00）及び昭和女子大学国際文化研究所主催国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト」への参加
出張者：松川節

◇2016年12月15日㈭
出張先：大阪第一ホテル
用　務：ハン・ヘンテイ（大ブルカン・カルドゥン山）プロジェクト・モンゴル側研究協力者 S. チョーロン氏（モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所所長）との共同研究ならびに研究打ち合わせ
出張者：松川節

◇2017年１月３日㈫～９日㈪
出張先：モンゴル科学アカデミー歴史･考古研究所、ガンダン寺学術文化研究所
用　務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査･研究
出張者：松川節

◇2017年２月11日㈯～18日㈯
出張先：モンゴル科学アカデミー歴史･考古研究所、ガンダン寺学術文化研究所、国際遊牧文明研究所、モンゴル国立大学
用　務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査･研究
出張者：松川節

◇2017年３月９日㈭～14日㈫
出張先：モンゴル科学アカデミー歴史･考古研究所、ガンダン寺学術文化研究所、国際遊牧文明研究所、モンゴル国立大学
用　務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査･研究
出張者：松川節

◇2017年３月23日㈭～30日㈭
出張先：［中国］中国蔵学研究中心、中央民族大学［モンゴル国］国際遊牧文明研究所、モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所
用　務：モンゴルにおける山岳信仰の調査・研究
出張者：松川節

一般研究阿部班
◇2017年11月24日㈭～29日㈫
出張先：タイ･バンコク市内ムスリム集住地区（ディンデーン、ナーナー、トンブリー、バーンラック、ジャラン・クルンの各地区）
用　務：タイ宗教紛争と国王死去に伴う服喪に関する現地調査
出張者：阿部利洋

◇2017年１月３日㈫～５日㈭
出張先：タイ･バンコク市内ムスリム集住地区（シーロム、バンカピ、ワタナの各地区）
用　務：タイ宗教紛争と仏教的規範に関する現地調査
出張者：阿部利洋

一般研究福田班
◇2016年11月19日㈯～20日㈰
出張先：身延山大学
用　務：第64回日本チベット学会学術大会における研究発表
出張者：石田尚敬、崔境眞

◇2017年１月９日㈪
出張先：大谷大学
用　務：ゴク・ロデンシェーラプの入力、科段表作成、ツルトゥンの翻訳の打ち合わせ
出張者：崔境眞

一般研究井黒班
◇2016年12月２日㈮～７日㈬
出張先：山西大学中国社会史研究中心、曲沃県（西海村龍王廟・景明村龍岩寺・靳氏家廟）
用　務：第二回中国人口資源環境与社会変遷学術研討会への出席および現地調査
出張者：井黒忍

一般研究西沢班
◇2016年11月19日㈯～20日㈰
出張先：身延山大学
用　務：第64回日本チベット学会大会参加のため
出張者：西沢史仁

◇2016年12月20日㈫～23日㈮
2017年１月18日㈬～20日㈮
2017年３月13日㈪～15日㈬

出張先：大谷大学真宗総合研究所
用　務：チベット古文書学研究会開催のため
出張者：西沢史仁

一般研究田崎班
◇2016年12月３日㈯～４日㈰
出張先：慶応義塾大学三田キャンパス
用　務：東南アジア学会第96回研究大会に出席し東南アジア現在的動向と「キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編」に関する研究動向をつかむ。
出張者：田崎郁子

◇2017年１月21日㈯
出張先：京都大学東南アジア研究所
用　務：東南アジア学会関西例会で「キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編」に関する研究発表を行いコメントを得て議論を発展させる。
出張者：田崎郁子

◇2017年３月14日㈫
出張先：京都大学東南アジア研究所　稲盛財団記念館３階会議室
用　務：和田理寛公聴会に出席し、タイとミャンマーのモン族に関する仏教研究と重ねて「キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編」に関する研究動向をつかむ。
出張者：田崎郁子

◇2017年３月19日㈰
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所　稲盛財団記念館201号室
用　務：第24回ゾミア研究会に出席し、東南アジア大陸部山地研究と重ねて「キリスト教聖書の翻訳にみられる現地語語彙の選択とローカル社会の再編」に関する研究動向をつかむ。
出張者：田崎郁子

一般研究脇中班
◇2017年３月21日㈫～30日㈭
出張先：ノルウェー・ウェイバック・オスロ、オスロ刑務所、オスロ大学、フィンランド・ヘルシンキ刑務所、スオメンリンナ島
用　務：北欧における更生保護実態調査
出張者：脇中洋

一般研究関本班
◇2016年11月10日㈭～11日㈮
出張先：金沢大学附属図書館
用　務：『苔の衣』諸本調査（金沢大学蔵本：７門24類５号）
出張者：関本真乃

一般研究堀田班
◇2016年11月21日㈪～22日㈫
出張先：①一般財団法人 東京大学仏教青年会
②東京大学図書館
用　務：①古典インド文法学研究会参加
②東京大学図書館での資料調査
出張者：堀田和義

◇2017年２月４日㈯～15日㈬
出張先：インド共和国マハーラーシュトラ州プネー市
用　務：ジャイナ教断食死文献の写本調査
出張者：堀田和義

一般研究髙橋班
◇2016年11月22日㈫～25日㈮
出張先：北海道大学
用　務：日本動物心理学会第76回大会での学会発表及び情報収集
出張者：髙橋真

■人事

研究所長　（新）加藤 丈雄　（旧）松川 節
（2017年４月１日付）

■PD研究員

□新規採用（2017年４月１日付）
稲葉 維摩

■客員研究員

□新規採用（2017年３月１日付）
＊裴　勇
現　　職：北京奮迅文化有限公司 総裁
研究期間：2017年３月１日～ 2018年２月28日

■特別研究員

□新規採用（2017年４月１日付）
＊NOROVTSEDEN Amgalan
現　　職：日本学術振興会論博研究者
研究期間：2017年４月１日～2020年３月31日
研究課題：モンゴル僧が著作したチベット語文献の研究：ロブサンミンジュールドウルジを例として
＊清水 洋平
現　　職：本学非常勤講師
研究期間：2017年４月１日～2021年３月31日
研究課題：東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明
＊田鍋 良臣
現　　職：本学非常勤講師
研究期間：2017年４月１日～2019年３月31日
研究課題：「黒ノート」に依拠したハイデッガーのナチズム問題の再検討―メタポリティークを軸に
＊塚島 真美
現　　職：任期制助教
研究期間：2017年４月１日～2020年３月31日
研究課題：19世紀フランス誌における宗教的混淆―教育から文学創造へ―
＊渡邊 温子
現　　職：本学非常勤講師
研究期間：2017年４月１日～2021年３月31日
研究課題：『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明
＊森 類臣
現　　職：任期制助教
研究期間：2017年４月１日～2019年３月31日
研究課題：北朝鮮の音楽政策に関する研究

□期間延長
小谷信千代：2018年３月31日まで１年間の期間延長

研　究　所　報　第70号

2017年７月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2017 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute